



島本町文化財調査報告書

第45集

広瀬遺跡発掘調査報告

令和5年3月

島本町教育委員会



島本町文化財調査報告書

第45集

令和5年3月

島本町教育委員会



序 文

本報告書は、町内の遺跡の広がりを把握することを目的に、原因者負担で平成27年度・平成28年度に実施した広瀬遺跡の宅地造成工事3件に伴う発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の広瀬遺跡の調査では、平安時代の遺物を含む溝跡や大量の土師器が出土した土坑群が見つかりました。特に、土坑群から出土した遺物は、コンテナ150箱を超えており、この一括資料が本町の土器研究の重要な資料となることは疑いようがありません。

このような成果を得られましたのも、工事事業者、土地所有者の方々、そして調査地近隣および関係諸機関の皆様のご理解とご協力をいただいたからこそ成し得たものです。改めてここに深く感謝の意を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和5年3月

島本町教育委員会
教育長 中村 りか

例 言

1. 本書は、大阪府教育文化財保護課の指導のもと、平成27年度・平成28年度に島本町教育委員会が実施した広瀬遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局教育こども部生涯学習課職員木村友紀・岩崎誠・久保直子を担当者とし、HS 15-1 金井戸の調査は平成27年8月28日から平成27年10月19日まで、HS 15-2 金井戸の調査は平成27年11月16日から12月16日まで、HS 16-1 金井戸の調査は平成28年6月10日から平成28年7月22日まで実施し、島本町立歴史文化資料館整理室で引き続き整理調査及び報告書作成業務を実施し、令和5年3月31日に本書の刊行を以て完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。(順不同)
【調査員】坂根 瞳 原 由美子
【調査補助員】布施 英子 川端 琢子 真子 悠乃
竹村 洋香 菅原 朋奈 宮田 和茂
4. 本書の執筆は木村(第1章、第2章第1節1~3・5、第2章第2節1~3・5)、久保(第2章第1節4、第2章第2節4)、岩崎(第2章第3節)が行い、作成・編集は木村・岩崎・坂根が行った。
5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれ

にあたる。

凡 例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海面水 (T.P. [Tokyo Peil]) を基準とした数値である。方位は、国土座標第IV系における座標北である。

2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版を使用した。

3. 遺構記号については、以下の通りである。

P : ピット SD : 溝 SK : 土坑
SB : 据立柱建物 SX : 不明遺構

目 次

序文

例言・凡例・目次

挿図目次・付表・図版目次

第1章 はじめに

第1節 島本町の地理的概要及び歴史的環境 1

第2章 調査の概要

第1節 平成27年度広瀬遺跡 (HS 15-1 金井戸)

発掘調査 3

1. 調査経過 3

2. 層位 6

3. 検出遺構 7



4. 出土遺物	8	第14図 H S 16-1 金井戸調査区土層図1 (1/50)
5. まとめ	8	第15図 H S 16-1 金井戸調査区土層図2 (1/50)
第2節 平成27年度広瀬遺跡 (H S 15-2 金井戸) 発掘調査	9	第16図 H S 16-1 金井戸調査区地区割と第1遺構面平 面図 (1/250)
1. 調査経過	9	第17図 H S 16-1 金井戸第2遺構面平面図 (1/250)
2. 層位	9	第18図 遺物集積遺構 S X 04・S X 05 遺物出土状況実測 図 (1/40)
3. 棲出遺構	9	第19図 大型土坑実測図 (1/150)
4. 出土遺物	12	第20図 挖立柱建物 S B 204 実測図 (1/50)
5. まとめ	12	第21図 土坑 S K 301 実測図 (1/20)
第3節 平成28年度広瀬遺跡 (H S 16-1 金井戸) 発掘調査	13	第22図 ピット P 01 土師器皿出土状況実測図 (1/10) - 22
1. 調査経過	13	第23図 ピット P 19 土師器皿出土状況実測図 (1/10) - 22
2. 層位	13	第24図 ピット P 206 石出土状況実測図 (1/10) - 22
3. 棲出遺構	13	第25図 ピット P 305 瓦器類出土状況実測図 (1/10) - 22
4. 出土遺物	23	第26図 ピット P 02 実測図 (1/10) - 23
(1) 土器	24	第27図 H S 16-1 金井戸出土遺物実測図1 (1/4)
(2) 瓦	30	第28図 H S 16-1 金井戸出土遺物実測図2 (1/4)
(3) 石製品	32	第29図 H S 16-1 金井戸出土瓦実測図1 (1/4) - 31
(4) 鉄製品	32	第30図 H S 16-1 金井戸出土瓦実測図2 (1/4) - 33
5. まとめ	32	

挿図目次

第1図 調査位置図 (1/2,500)	2
第2図 H S 15-1 金井戸調査区土層図 (1/80)	3
第3図 H S 15-1 金井戸第2遺構面平面図 (1/400)	4
第4図 H S 15-1 金井戸第3遺構面平面図 (1/400)	4
第5図 H S 15-1 金井戸3・6区第2遺構面ピットP・ 土坑S実測図 (1/60)	5
第6図 ピットP 342 実測図	5
第7図 H S 15-1 金井戸3区第3遺構面ピットP実測 図 (1/60)	6
第8図 溝SD 201 実測図 (1/100)	7
第9図 H S 15-2 金井戸調査区土層図 (1/50)	10
第10図 H S 15-2 金井戸第2遺構面平面図 (1/200)	11
第11図 H S 15-2 金井戸第3遺構面平面図 (1/200)	11
第12図 ピットP 101 実測図 (1/40)	12
第13図 落ち込みSX 101 実測図 (1/50)	12

図版目次

図版一 H S 15-1 金井戸検出遺構	
1 1・4地区第3遺構面溝SD 201 (西から)	
2 2地区第3遺構面 (北から)	
3 3地区第2遺構面 (北から)	
4 3地区第3遺構面、6地区第2遺構面 (北 から)	
5 5地区第3遺構面ピット周辺 (西から)	
6 6地区第3遺構面 (北から)	
7 7地区第2遺構面 (北から)	
8 7地区第3遺構面 (北から)	
図版二 H S 15-1 金井戸出土遺物	
H S 15-2 金井戸検出遺構	
1 2地区第2遺構面 (西から)	
2 3地区第2遺構面 (南から)	
3 集石 (南から)	



- | | | |
|-----|--|--|
| 4 | 3地区第3造構面（南から） | 西から） |
| 5 | 土器頭まり（南から） | 5 第2トレンチ大型土坑S X 07・S X 202（東から） |
| 6 | S X 101（南から） | 6 第2トレンチ大型土坑S X 07・S X 202
堆積土層（北から） |
| 7 | S X 101 遺物出土状況（南から） | 7 第2トレンチ大型土坑S X 10（北西から） |
| 8 | P 121（東から） | 8 第2トレンチ大型土坑S X 11（北から） |
| 図版四 | H S 15-2 金井戸出土遺物 | H S 16-1 金井戸検出遺構（一） |
| 図版五 | H S 16-1 金井戸検出遺構（一） | 1 第1トレンチ全景（南西から）
2 第1トレンチ（北東から）
3 第2トレンチ全景（北西から）
4 第2トレンチ全景（南東から）
5 第3トレンチ全景（北東から）
6 第3トレンチ全景（西から）
7 第2トレンチ遺物集積遺構 S X 04 遺物出土状況（北から）
8 第2トレンチ遺物集積遺構 S X 05（南東から） |
| 図版六 | H S 16-1 金井戸検出遺構（二） | 図版八
1 第2トレンチ遺物集積遺構 S X 05 東端土
師器皿出土状況（東から）
2 第2トレンチ遺物集積遺構 S X 05 中央部
（北東から）
3 第2トレンチ遺物集積遺構 S X 05 中央部
軒瓦出土状況（南西から）
4 第2トレンチ遺物集積遺構 S X 05 西部（北
東から）
5 第2トレンチ集積遺構 S X 05 東部軒瓦出
土状況（南西から）
6 第1トレンチ溝 S D 02 内遺物集積遺構 S
X 08（南から）
7 第1トレンチ溝 S D 02 内遺物集積遺構 S
X 08（北から）
8 第2トレンチ大型土坑群（西から） |
| 図版七 | H S 16-1 金井戸検出遺構（三） | H S 16-1 金井戸出土遺物（一）
H S 16-1 金井戸出土遺物（二）
H S 16-1 金井戸出土遺物（三）
H S 16-1 金井戸出土遺物（四）
H S 16-1 金井戸出土遺物（五）
H S 16-1 金井戸出土遺物（六） |
| | 1 第2トレンチ大型土坑 S X 06 検出状況（北
から）
2 第2トレンチ大型土坑 S X 06 検出状況（北
から）
3 第2トレンチ大型土坑 S X 07・S X 202（南
西から）
4 第2トレンチ大型土坑 S X 07・S X 202（南 | |





第1章 はじめに

第1節 島本町の地理的概要及び歴史的環境

島本町は、大阪府の北東端部、京都府との境に位置し、その東側は北から京都府京都市、長岡京市、大山崎町、八幡市と、西側は大阪府高槻市、南端は大阪府枚方市と隣接する。町域は、概ね南北約7km、東西約4kmの範囲に南北に細長く広がり、面積は約16.81km²となる。

その地形は、町域の西から北側が山地・丘陵地、東から南側は平野部となるが、山地・丘陵地が町域の約7割を占めている。島本町史によると、山地部は北摂山地の東端に当たり、中でも京都盆地と接して南北走する山地部を西山山塊とよび、西山山塊のうち町域の北側にはポンポン山山地が連なり、その南東側に一段低い天王山山地がある。これらの山地部は主に丹波層群によって構成され、砂岩、頁岩、チャート等の岩石からなる。そして、天王山山地の南側には狭い範囲ながら山崎・桜井丘陵とよばれる丘陵地がみられ、主に大阪層群によって構成されている。

また、平野部は、9～13m程度の標高で広がり、主に河川堆積物によって構成され、淀川低地とよばれる。本町南東の山崎狭隘においては、京都盆地から流れ込む桂川、宇治川、木津川の三川が合流し、淀川となって大阪平野を西流するが、本町には、淀川のほか、山地・丘陵地を源とする水無瀬川、善峰川、滝谷川、鈴谷川、越谷川、八幡川、西谷川等の河川があり、水無瀬川を除いては、山地・丘陵部から短く平野部に流れ出るという小規模なものが多い。淀川低地は、主に淀川からの供給物によって構成されるが、水無瀬川等の他の河川からの堆積物によっても構成され、小河川付近には扇状地地形が広がる。また、水無瀬川沿いには、河岸段丘地形がみられる箇所もある。

島本町は、古代の国郡制においては摂津国島上郡に属するが、東は山城国に接し、その地勢から島本は交通の要衝となっていた。南に流れる淀川は水運の重要な交通路であり、特に長岡京・平安京遷都以降はその重要性は増していく。平安時代、山崎（大山崎町域も含め）には津が整備され、また遡る奈良時代には架橋もされ、淀川を介した島本付近の地域的重要性がわかる。さらに、水運ばかりではなく、淀川と丘陵部との間に挟まれた平野部上においては、平安京と西国を結ぶ山陽道（西国街道）が通り、陸路においても重要な幹線路が貫いていた。すでに奈良時代においても、平城京と西国とを結ぶ幹線道路上に駅伝制の駅が置かれ、島本付近には大原駅が設置されたと考えられている。

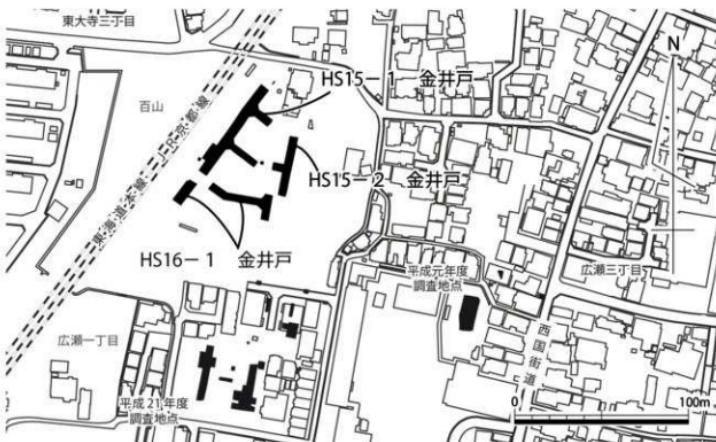
本書で報告する広瀬遺跡は、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、古くは縄文時代晩期の竪穴式建物跡が確認され、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物も検出されているが、平安時代以降、確認される遺構・遺物の量は増大する。それは、長岡京・平安京遷都によって、その地勢的重要性が増していくことに関連するものと考えられるが、広瀬遺跡における西国街



道沿いで発掘調査では小石敷きの路面をもつ中世の道路状遺構が検出されている。そこでは平安時代の遺物も出土しており、その整備が古代にまで遡る可能性が指摘されている。

また、こうした地勢的背景もあったと考えられるが、島本には、平安時代から鎌倉時代にかけて、天皇や貴族が度々遊行に水無瀬の地を訪れている。桓武天皇や嵯峨天皇は遊獵を好み、文徳天皇の子である惟喬親王はこの地に御殿を築いたという。広瀬遺跡においては平安時代前期の建物跡群が検出されているが、これは惟喬親王の水無瀬離宮関連施設の可能性が考えられている。また、鎌倉時代には、後鳥羽上皇が正治元（1199）年に水無瀬離宮を造営している。この水無瀬離宮は建保4（1216）年の洪水で倒壊したが、翌年には丘陵上に再建されたという。広瀬遺跡では、後鳥羽上皇の水無瀬離宮に関連するものと考えられる建物跡や所用瓦が検出されており、広瀬遺跡の南西丘陵上にある西浦門前遺跡では、庭園跡と考えられる遺構が検出されている。さらに広瀬遺跡の南西平野部に位置する尾山遺跡においては、平安時代から鎌倉時代にかけての建物跡が確認されているが、ここでは庭園に付随する可能性が考えられる池泉跡が検出されている。

このように、広瀬遺跡及びその周辺では、道路状遺構や離宮等関連遺構など、平安時代以降の島本の地勢を特徴的に示すような資料が得られている。



第1図 調査位置図 (1/2,500)



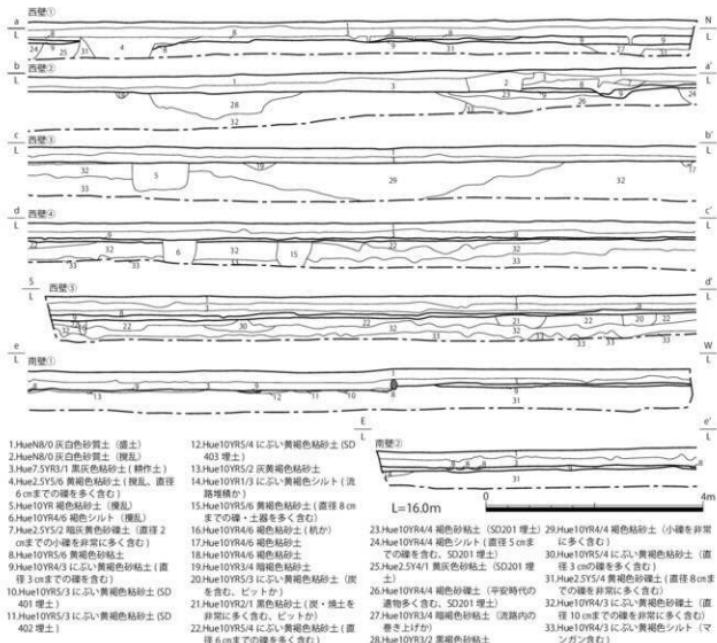
第2章 調査の概要

本調査事業は、広瀬遺跡内の宅地造成工事に伴い、確認調査を実施した結果、中世を中心とする遺構・遺物の存在を確認したため、発掘調査を実施したものである。平成27年度に2期、平成28年度に1期の宅地造成工事が計画されたため、恒久的な構造物である道路部分を対象として発掘調査を実施した。それぞれの調査名は、平成27年度に実施したの2期の発掘調査を、平成27年度広瀬遺跡（HS 15-1 金井戸）発掘調査（以下、「HS 15-1 金井戸」という。）、平成28年度に実施した平成28年度広瀬遺跡（HS 16-1 金井戸）発掘調査（以下、「HS 16-1 金井戸」という。）と設定して、調査を実施した。

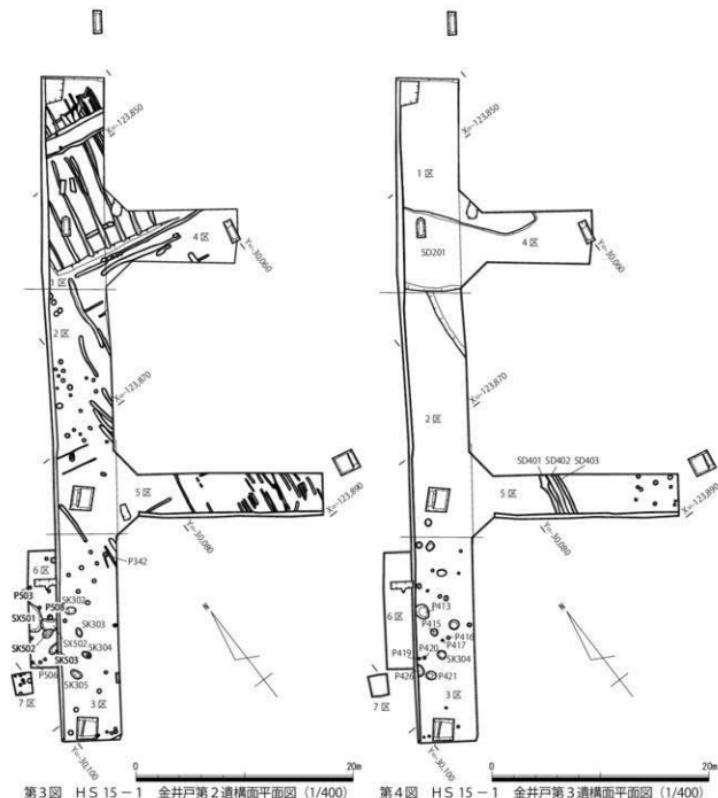
第1節 平成27年度広瀬遺跡（HS 15-1 金井戸）発掘調査

1. 調査経過

当調査地の約100m南に位置する場所では、水無瀬離宮に関連する建物跡と考えられる遺



第2図 HS 15-1 金井戸調査区土層図 (1/80)

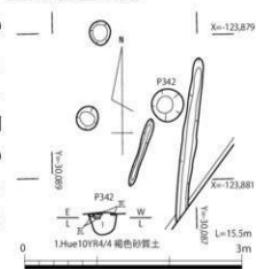
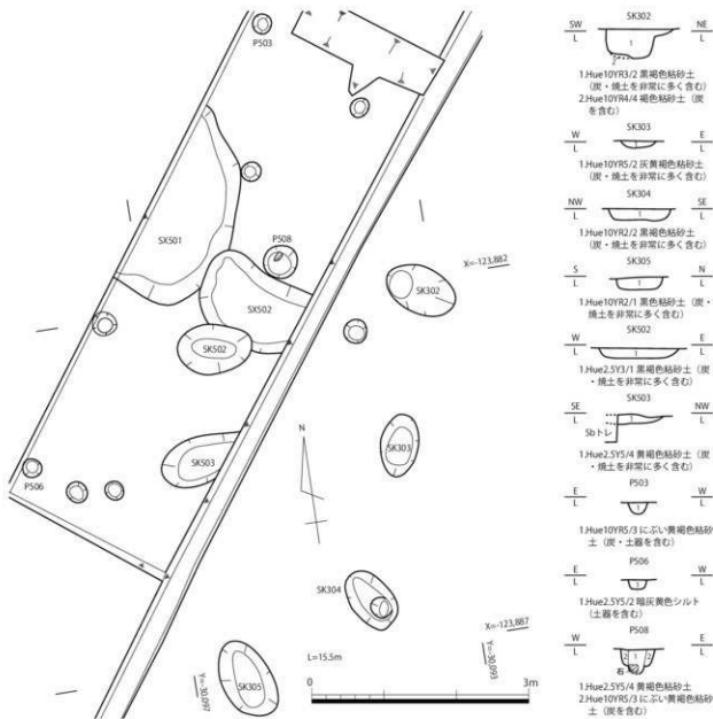


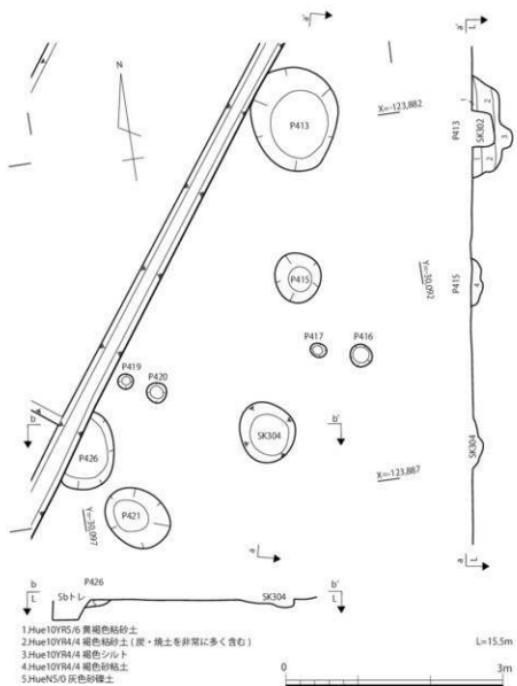
第3図 HS 15-1 金井戸第2遺構面平面図 (1/400)

第4図 HS 15-1 金井戸第3遺構面平面図 (1/400)

構を検出している⁽¹⁾(第1図)。また、当調査地の旧小字名は「金井戸」であり、後鳥羽上皇が菊一文字と呼ばれる刀を打った際に使用した井戸が存在したという伝承が由来となった地名である。『大阪府全志』によれば、東海道本線 J R 京都線が敷設される以前は、当調査地周辺に井戸が存在していたようである⁽²⁾。

そのため、宅地造成工事前に、道路部分を対象として、6か所の確認調査を実施したところ、中世を中心とする遺構・遺物の存在を確認したため、発掘調査に移行したものである。なお、発掘調査を実施するにあたり、第3図及び第4図のとおり調査区を1～5区に分けて、調査を





第7図 HS 15-1 金井戸3区第3遺構面ピットP実測図(1/60)
遺構面として、改めて、平面的な確認を行ったところ、ピット・土坑・溝などの遺構を確認した。

第2遺構面の調査終了後、第9層を除去し、第3遺構面として平面的な確認を行ったところ、この面においても、ピット・土坑・溝などの遺構を確認した。この第3遺構面の基盤となる第22・28・29・31・32層は、土層が水平に堆積しておらず、礫が非常に多いことから、土石流などによる堆積と考えられる。

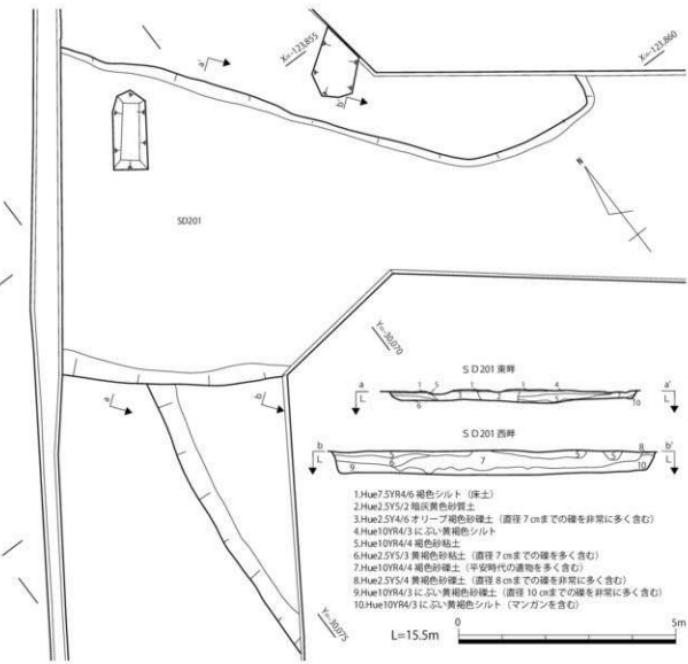
第3遺構面から約30cm深い位置に比較的安定したにぶい黄褐色シルトの第33層が堆積するが、遺構・遺物の存在は確認できなかった。

第2遺構面及び第3遺構面から出土する遺物の年代幅が大きく、平安時代・鎌倉時代の遺物が中心であるが、弥生時代の遺物も少量含んでいる。遺物を含む土層が、土石流などによりか

2. 層位(第2図)

当調査地は、近年、駐車場として利用されており、調査地全域に約20cmの厚さで灰白色砂質土(第1層)の盛土がされていた。駐車場以前は、水田が営まれていたため、第1層の直下に黒灰色粘土の耕作土が堆積する(第3層)。この第3層を除去した面を、第1遺構面として、平面的に遺構・遺物の広がりを確認した。

しかしながら、この第1遺構面においては、近現代のものと考えられる多量の鋤溝のみしか確認できなかったため、第1遺構面の基盤層である黄褐色砂粘土の第8層を除去し、第9層直上を第2



第8図 溝SD 201実測図(1/100)

き混ぜながら運ばれ、堆積したものと思われる。出土遺物の年代から、第2遺構面は鎌倉時代の生活面、第3遺構面は平安時代の生活面と考えられる。

3. 検出遺構

土坑SK 302・303・304・305・502・503(第5図) 第2遺構面の調査区南西隅付近で、幅60cm前後、長さ100cm前後の埋土に炭と焼土を多く含む土坑6基検出した。3区調査時にSK 302・303・304の3基が直線上に並んでいる状況を確認し、建物跡になる可能性があったため、調査区を6区として西側に拡張し、遺構検出したところ、新たにSK 502・503の2基を確認したが、建物のように遺構が並ぶ状況は確認できなかった。炭や焼土を廃棄するために掘られたものであろう。

ピットP 508(第5図) 6区の第2遺構面で検出した。直径約50cm、深さ約30cmのピットであり、柱穴を有し、柱穴の底には石が置かれていた。建物の柱穴となる可能性があるが、



周間に同様のピットの存在は確認できなかった。

ピット P 342（第6図） 3区北西隅付近の第2遺構面において、直径約40cm、深さ約30cmの鎌倉時代前半の瓦を多く含むピットを検出した。出土瓦は、広瀬遺跡の平成21年度の調査⁽³⁾や西浦門前遺跡の平成27年度の調査⁽⁴⁾で出土した瓦と同様のものである。

ピット P 413・415・421・426（第7図） 3区南西隅付近の第3遺構面において、直径60～140cmのやや大型のピットを検出した。第2遺構面で検出したSK 302・303・304・305と位置が近く、その大きさも似るが、その関係性は不明である。

溝 S D 201（第8図） 第3遺構面で検出した1区及び3区にまたがる自然流路である。西から東に向かって流れる流路であり、調査区内での最大幅は約750cm、深さ約50cmである。須恵器や土師器などの平安時代の遺物を多く含むが、土馬も2点出土しており、この流路周辺において、祭祀が行われた可能性がある。

4. 出土遺物（図版2）

今回の調査では、総コンテナ数7箱の遺物が出土している。出土遺物には、土器類を中心として各種の遺物が出土している。土師器皿（1～3）がその大部分を占め、その中に須恵器（6～8）や黒色土器A類（内面のみ黒色化）、B類（両面を黒色化）（9）、瓦器等（10）が出土し、僅かではあるが縁釉陶器、灰釉陶器（11）、輸入陶磁器類（12）、土馬（13）が出土している。瓦は、巴文軒丸瓦（14）、丸瓦（15）、平瓦（16・17）が出土しているが、水無瀬離宮関連施設周辺から出土した瓦と同様のものであり、鎌倉時代前半のものである。他に金属製品、石鎚（18）も出土している。

5.まとめ

当調査では、鎌倉時代のピット・土坑・溝などを確認したが、建物のように遺構が並ぶ状況は確認できなかった。しかし、調査区南西付近に焼土や炭が多く含む土坑を検出し、調査区南西側で活発に土地利用されたことがうかがえる。当調査地より南に位置するHS 16-1 金井戸においては、大量の土師器が投棄された大型土坑を検出しており、鎌倉時代の当調査地南西付近からHS 16-1 金井戸の調査地にかけては、投棄するための場所として利用されているのかもしれない。

また、平安時代の遺物を多く含む東西方向に流れる溝が見つかった。そのため、上流側である当調査地より西に、平安時代の施設や集落などが存在する可能性がある。そして、土馬といった祭祀遺物が出土しており、近隣で川にまつわる祭祀が行われた可能性がある。



第2節 平成27年度広瀬遺跡（HS 15-2 金井戸）発掘調査

1. 調査経過

HS 15-1 金井戸の東隣の敷地で行われた宅地造成工事に伴う発掘調査である（第1図）。HS 15-1 金井戸の調査成果により、ピットや平安時代の溝が当調査地にまで続くことが明らかであるため、発掘調査を実施した。調査区は、発掘調査対象となった宅地造成工事の道路部分の形状のとおり設定した結果、T字型を呈すこととなったため、第10図及び第11図のとおり北端から分岐点までを1区、分岐点付近と西側に延びるトレーナーを2区、分岐点から南端までを3区と呼称して調査を実施した。

2. 層位（第9図）

当調査地の現状は畠地であり、地表面から約20cmの厚さで灰色シルトの耕作土（第1層）が堆積し、その下に約5cmの厚さで黄灰色シルトの床土（第2層）が堆積する。第2層直下を、第1遺構面として平面的に遺構・遺物の広がりの確認を行ったが、HS 15-1 金井戸と同様に、鉢溝のみしか確認できなかったため、第1遺構面の調査は検出状況の写真撮影にのみ留め、第2遺構面の調査に移行することとした。

第2層の下には、暗褐色粘砂土（第4層）、暗灰黄色粘砂土（第7層）が調査地全域に堆積しており、その直下の第14・15・17・28層を基盤とする面（第2遺構面）が、HS 15-1 金井戸の第2遺構面と対応すると考え、平面的に遺構・遺物の広がりの確認を行った。その結果、少数であるが、ピット・土坑・溝などの遺構の存在を確認した。

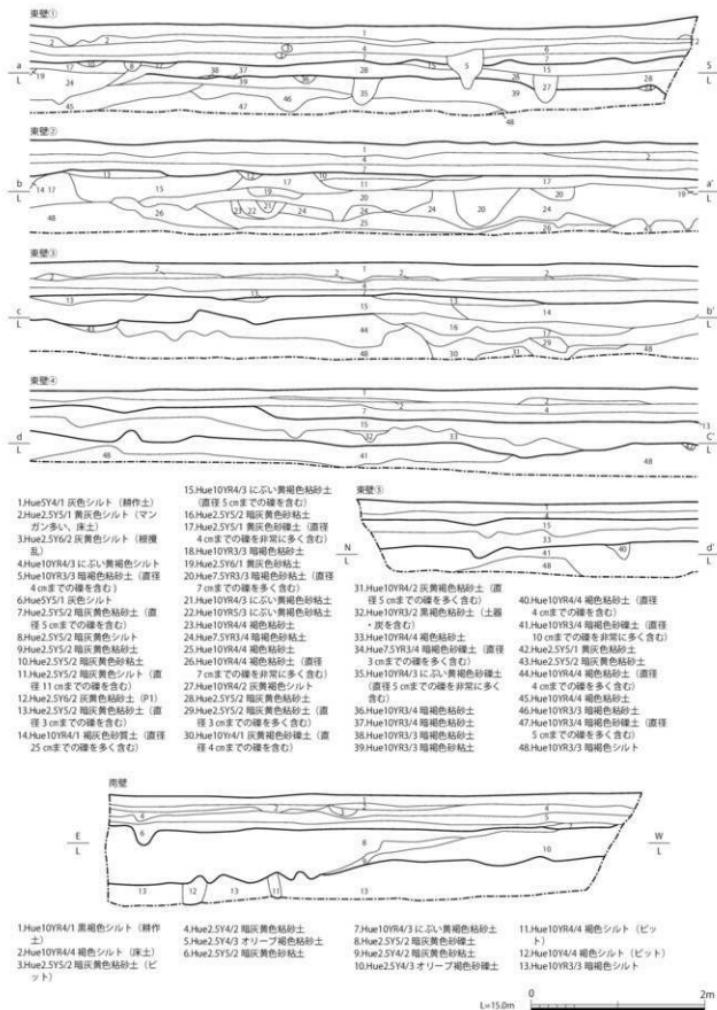
第14・15・17・28層及びその下に堆積している暗灰黄色粘砂土（第28層）、褐色粘砂土（第33層）を除去した第39・41・44・48層を基盤とする面（第3遺構面）が、HS 15-1 金井戸の第3遺構面と対応すると考え、平面的に遺構・遺物の広がりの確認を行った。その結果、ピット・土坑・落ち込みなどの遺構の存在を確認した。

第2遺構面より下は、暗褐色粘砂土（第39層）、暗褐色砂礫土（第41層）、暗褐色粘砂土（第44層）が堆積しており、その下には比較的安定した暗褐色シルト（第48層）が堆積していたが、第48層周辺に遺構・遺物の存在は確認できなかった。

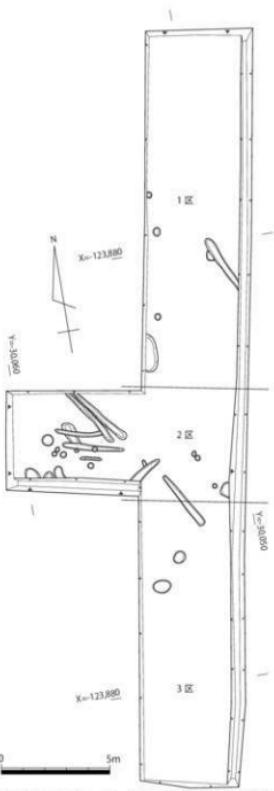
3. 検出遺構

集石（図版三-3） 3区の第2遺構面において、直径約50cm内に石が多く集まっている場所を確認したが、掘形は確認できなかった。遺構ではなく、流路などにより石が集まつたものへの可能性がある。

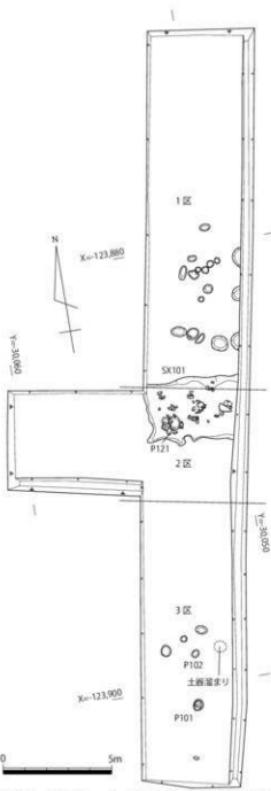
P 101（第12図） 3区の第3遺構面で検出した直径約50cm、深さ約10cmのピットであり、その底に直径約30cmの石が存在する。建物跡などの柱穴の可能性が考えられたが、周辺に底に石が存在するピットは存在せず、約2m南に上面が平坦な直径約20cmの石が存在するもの



第9図 H S 15-2 金井戸調査区土層図 (1/50)



第10図 HS 15-2 金井戸第2遺構面平面図 (1/200)



第11図 HS 15-2 金井戸第3遺構面平面図 (1/200)

の、掘形は確認できなかった。

落ち込み S X 101 (第13図) 第3遺構面の1区南端から2区東側付近で検出した南北幅約3m、東西幅4m以上の落ち込みであるが、東側は調査区外に延びており、東西幅は不明である。落ち込み内には、直径70cmまでの石と土師器や黒色土器A類などの平安時代の遺物を多く含む。遺構として取り扱ったが、2区付近はHS 15-1 金井戸のSD 201から続く自然流路の影響を強く受けしており、流路内の壅んだ場所に石や遺物が溜まったもの可能性がある。

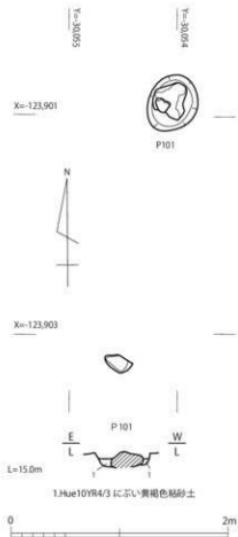


4. 出土遺物（図版4）

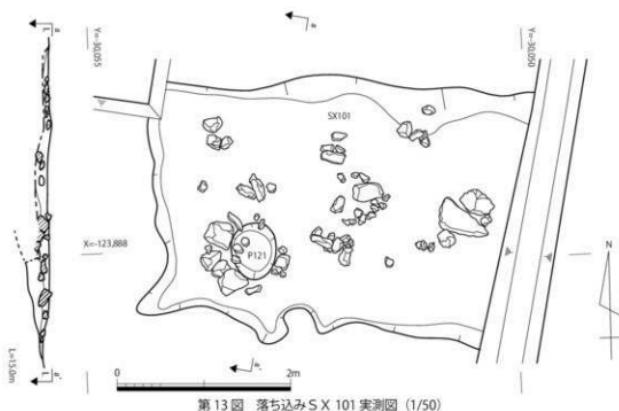
今回の調査では、総コンテナ数11箱の遺物が出土している。出土遺物には、前述のHS 15-1 金井戸と同じく、土器類を中心として各種の遺物が出土している。土師器皿（19～23）が大部分を占め、次いで瓦器（26～33）、須恵器（24）や黒色土器（A・B類）が出土しており、少量の綠釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器類（34～36）、土馬（44）が少量出土している。瓦は、巴文軒丸瓦（38）、剣頭文軒平瓦（39・40）、均整唐草文軒平瓦（41）といった他の水無瀬離宮関連施設と同様のものも出土しているが、37・42・43のように、古代に属する瓦も出土している。また、金属製品や石製品も出土している。

5.まとめ

明確な遺構は、ピット・土坑・溝などの小規模のものしか確認できなかったが、HS 15-1 金井戸と同様に、平安時代及び鎌倉時代を中心とする遺構・遺物の存在を確認した。遺物では、綠釉陶器や灰釉陶器、古代の瓦などが出土しており、古代寺院などといった施設が周辺に存在した可能性がある。



第12図 ピットP 101 実測図(1/40)



第13図 落ち込みSX 101 実測図(1/50)



第3節 平成28年度広瀬遺跡（HS 16-1 金井戸）発掘調査

1. 調査経過

当事業は、宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査として実施した。調査地は、JR島本駅の北東約450mに位置し、西辺は東海道本線・JR京都線で限られる（第1図）。立地は、沖積扇状地下水面である⁽⁵⁾。調査着手前の調査地は、水田跡地であった。調査区は、道路計画予定地に設定した。調査地にある水田跡地の北隣接地では、平成27年度に調査し、多くの成果を上げている。調査区は、調査地西側に北東-南西方向の第1トレンチ、中央部の「く」の字状に屈曲した東西方向に長い第2トレンチ、第2トレンチ東端に接続する北東-南西方向の第3トレンチとし、各トレンチは、基本的に5m間隔で地区割りを設定した（第16図）。

2. 層位（第14・15図）

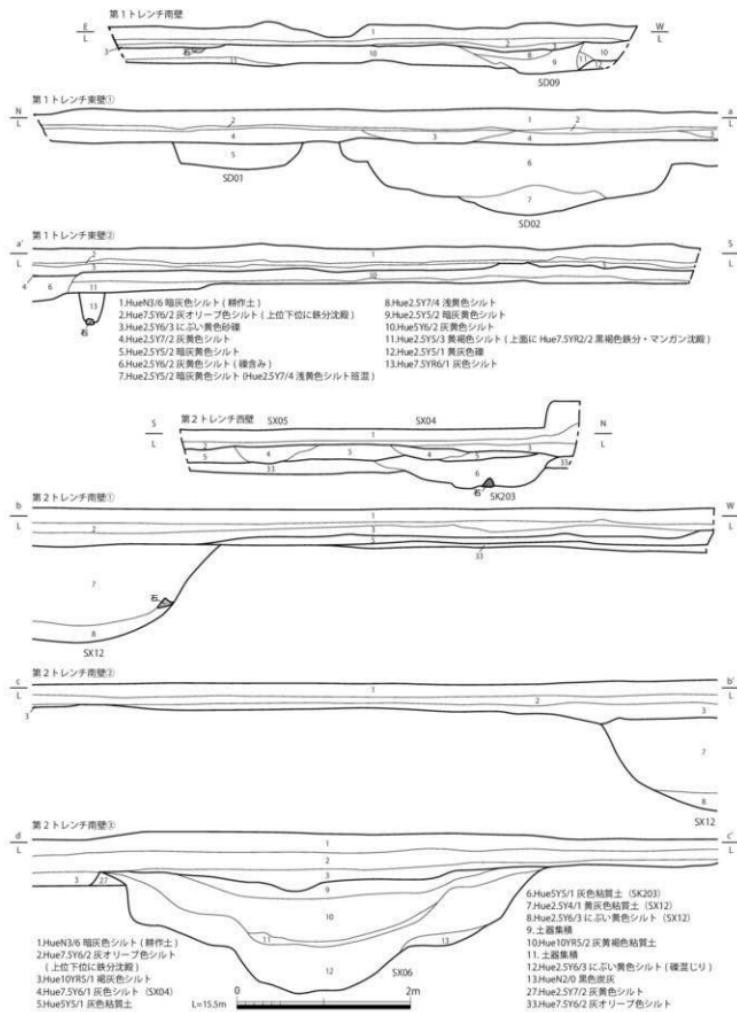
第1トレンチの土層は、基本的に第1層、第2層、第3層、第4層、第10層、第11層に分けられる。第1層は、暗灰色シルトで水田耕作土である。第2層は灰オリーブ色シルトの堆積であり、上位面と下位面に鉄分沈殿が見られ、黄褐色の色調になっていた。第1層は厚さ約20cm、第2層は厚さ約5cmであった。第3層は、洪水堆積層と考えられるにぶい黄色砂礫で、部分的な堆積である。第4層は灰黄色シルトで、第1トレンチ北半部に見られる厚さ約15cmの堆積である。これらの堆積を除去した面から、4条の溝を検出した。これを第1遺構面と呼ぶ。第1遺構面以下には、第1トレンチ南半部に、厚さ約20cmの灰オリーブ色シルト（第10層）堆積があり、その下に部分的に黄褐色シルト（第11層）堆積が見られた。これらを除去した段階で、ピットを検出した。この面を第2遺構面と呼ぶ。

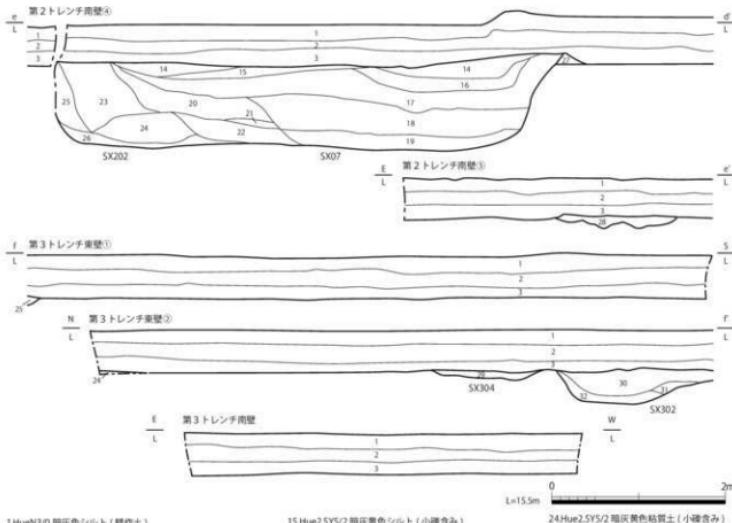
第2・3トレンチの土層は、基本的に第1層、第2層、第3層、第5層、第33層に分けられる。第1層と第2層は、第1トレンチと同じ堆積である。第1層は、第2トレンチの東部（第11区）で約30cmの段差で低くなり、西の水田面より東の水田面が棚田状に低いことを確認した。第3層は、西方に薄く東方に厚い褐灰色シルトで、第1トレンチ第4層に対比できる土層と思われる。この土層を除去した段階で、遺物集積遺構や溝を検出した。この遺構検出面は、第1トレンチでの第1遺構面に相当する。第5層は、第2トレンチ西部に堆積が見られる灰色粘質土で、第2トレンチ西端では厚さ約15cmを測る。この土層を除去した段階で、大型土坑群や柱穴群などを検出した。この面は、第1トレンチでの第2遺構面に相当する。第5層は、第1トレンチ第10層に対比できる堆積と思われる。第33層は、灰オリーブ色シルト層で、褐色砂礫層とともに第2遺構面を構成する基盤層である。

3. 検出遺構（第16・17図）

【第1遺構面検出遺構】

第1遺構面から検出した遺構には、遺物集積遺構と溝がある。遺物集積遺構には、土師器皿





1.HueN3/0 灰褐色シルト (耕作土)	15.Hue2.5Y5/2 離床黄色シルト (小礫含み)
2.Hue7.5Y6/2 深オーリーブ色シルト (下2層有り、各種間にHue10YR6/6 明黄褐色鉄分沈殿)	16.Hue2.5Y6/2 灰黄色シルト (小礫含み)
3.Hue2.5Y6/1 灰褐色シルト (耕作・マンガン含み)	17.土器
4.土器集積	18.Hue10YR6/1 灰褐色シルト (下位に土器集積)
10.Hue10YR5/2 灰黃褐色粘質土	19.Hue5Y5R/1 灰色シルト (土器に土器集積)
11.土器集積	20.Hue5Y5R/2 灰褐色粘質土 (小礫含み)
12.Hue2.5Y6/3 にぶい黄色シルト (雜混じり)	21.Hue10YR4/2 灰褐色粘質土 (小礫含み)
13.Hue2N2/0 黒色炭灰	22.Hue5Y4/1 灰色粘質土
14.Hue2.5Y6/1 灰黄色シルト (小礫混じり)	23.Hue2.5Y4/1 黑色粘質土 (小礫含み)
	24.Hue2.5Y5/2 灰床黄色粘質土 (小礫含み)
	25.Hue2.5Y6/2 灰褐色粘質土 (小礫含み)
	26.Hue10YR4/2 灰褐色粘質土
	27.Hue2.5Y7/2 灰褐色シルト
	28.Hue7.5Y6/1 灰色シルト
	29.Hue7.5Y6/1 灰色シルト (下位に土器集積)
	30.Hue2.5Y6/2 灰黃褐色粘質土 (小礫含み)
	31.Hue2.5Y6/1 黑色粘質土
	32.Hue2.5Y6/2 深オーリーブ色粘質土

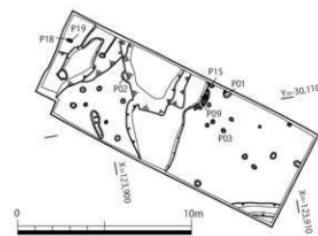
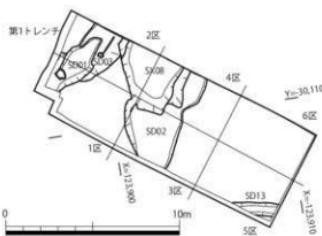
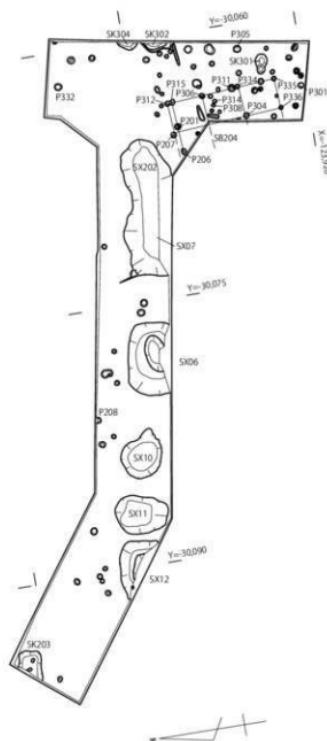
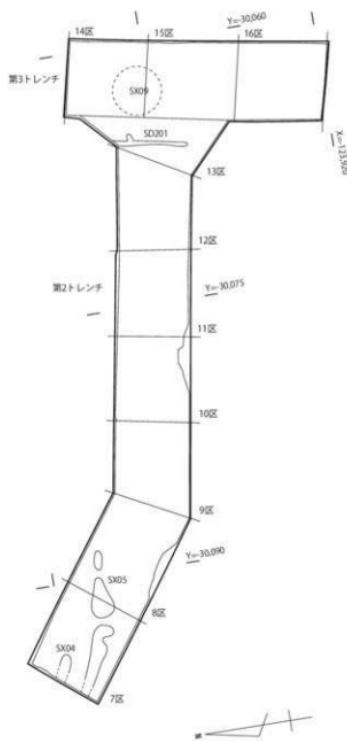
第15図 HS 16-1 金井戸調査区土層図2 (1/50)

類を中心に集積したS X 04、瓦類を中心に集積したS X 05、瓦器羽釜や須恵器鉢などを中心に集積したS X 09がある。溝には、幅広い溝S D 01・02・03・13と細く浅い溝S D 201がある。このうち、溝S D 01～03は、第1トレンチ第10・11層の堆積がない位置からの検出であり、第2遺構面の遺構である可能性がある。

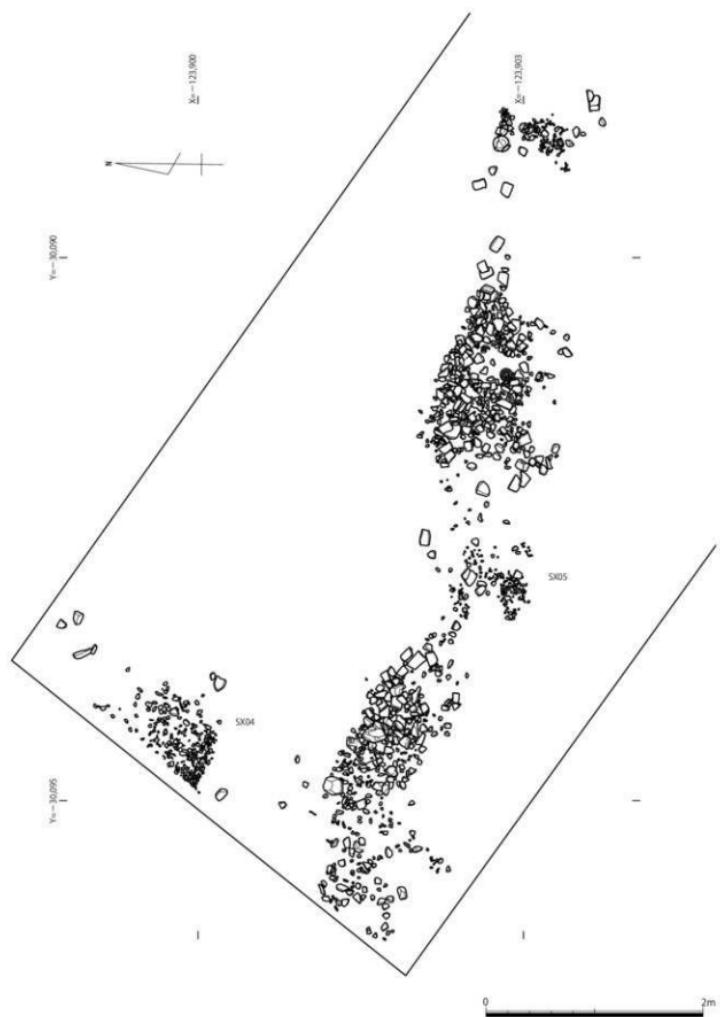
遺物集積遺構 S X 04 第2トレンチ西端（第7区）で検出した。南北幅約90cm、東西の長さ1m以上で、西はトレンチ外へ延びる。深さ約10cmの溝状くぼみに、土器器皿を中心とした遺物が集積していた。出土土器のほとんどは、破片となった状態であった（第18図、図版五一七）。

遺物集積遺構 S X 05 第2トレンチの西部（第7～8区）で検出した。

南北幅約1m、東西の長さ約8mを検出し、西端はトレンチ外に延びる。深さ約20cmの溝状くぼみに、瓦を中心とした遺物が集積していた。瓦などの集積状況は、北辺を揃えたように



第16図 HS 16-1 金井戸調査区地面剖面と第1遺構平面図
第17図 HS 16-1 金井戸第2遺構平面図 (1/250)
(1/250)



第18図 遺物集積構造SX 04・SX 05遺物出土状況実測図 (1/40)



見える（第18図、図版五一・8、図版六一・1～5）。

遺物集積構S X 09 第3トレンチのほぼ中央部（第14～15区）で検出した遺構である。瓦器羽釜や須恵器鉢など、煮炊・調理関係の器形が目立ち、食膳形態の瓦器椀や土師器皿は少ない。直徑約1mの範囲に集積していた。

溝S D 01 第1トレンチ北端で検出した溝である。幅2～2.5m、深さ25～28cmを測る。溝底は、西半部が深くなっている。埋土は、暗灰黄色シルト1層であった。出土遺物は少なく、土師器小片や綠釉陶器の細片1点などが出土したにとどまる。

溝S D 02 第1トレンチ北部（第1～4区）で検出した溝である。幅2～6mで、西から東に広くなる。深さは、幅狭い西端で約20cm、最も幅広い東端で80cmを測り、中央部から東に大きく落ち込む。埋土は、東端で厚さ約50cmの灰黄色シルトと、下層の厚さ約35cmの暗灰黄色シルトからなる。溝底が東に落ち込む部分には、土師器皿が集積していた。これを遺物集積構S X 08と呼ぶ。

溝S D 03 第1トレンチ北部（第2区）で、溝S D 01と溝S D 03をつなぐように検出した溝である。幅約1m、深さ約10cmの溝で、埋土は溝S D 01と同様、暗灰黄色シルト1層であった。

溝S D 13 第1トレンチ南西端（第5区）で検出した溝である。幅約1.4m、深さ約30cmを測る。埋土は、上層に薄く堆積したにぶい黄色シルトと、下層の厚い灰オリーブ色シルトの2層に分けられる。

溝S D 201 第2トレンチ東端（第13区）で検出した細く浅い溝である。幅約10cm、深さ約5cmを測る。埋土は、第2トレンチ第3層と同じ褐灰色シルトであった。

【第2遺構面検出遺構】

第2遺構面から検出した遺構には、大型土坑、掘立柱建物、土坑、ピット、溝がある。大型土坑は、6基が一列に並ぶ（第19図）。

大型土坑群S X 06・07・10・11・12・202 第2トレンチ南辺（第8～13区）で検出した土坑群である（図版五一・3・4）。大型土坑S X 06とS X 07は、外縁部が盛り上がり、輪郭が第1遺構面から検出された（図版七一・1・3）。しかし、トレンチ断面で、第2トレンチ第3・5層堆積前に埋まっていることを確認した。

S X 06は、第10区で検出した。東西幅約4.2m、南北2.5m以上の隅丸方形平面で、深さ約1.1mを測る（図版七一・2）。南半部は、調査区外に広がる。埋土は、土師器皿を中心とした厚さ約15cmの遺物集積層があり、それより下層は、上から順に厚さ約40cmの灰黄褐色粘質土、厚さ約5cmの土器集積層、厚さ約40cmのにぶい黄色シルトが堆積しているのを確認した。この堆積状況から、土器の投棄が2期にわたっていると察せられる。



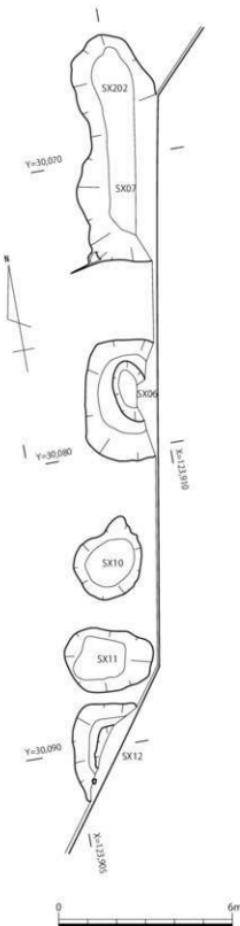
S X 07 は、第 11 ~ 12 区で検出した。東西幅約 5 m、南北 2.8 m 以上の隅丸方形平面で、深さ約 1.1 m を測る(図版七-4)。南半部は調査区外に広がる。東辺は、S X 202 と重複しており、埋土の違いから、S X 202 より新しいことを確認した。S X 07 の埋土は、上から順に、厚さ約 10 cm の灰黄色シルト、厚さ約 10 cm の暗灰黄色シルト、厚さ約 20 cm の灰黄色シルト、厚さ約 30 cm の土師器皿を中心とした遺物集積層、厚さ約 40 cm の褐色シルト層、土師器皿を中心とした遺物集積層、厚さ約 20 cm の灰色シルト、土師器皿を中心とした遺物集積層が堆積していることを確認した。土器などの投棄は、堆積状況から、少なくとも 3 期あることがわかる。当土坑の東辺には、上記各層堆積前の堆積と考えられる黄灰色粘質土・灰黄褐色粘質土・灰色粘質土があり、掘りなおされていることがわかる(図版七-6)。

S X 10 は、第 9 区で検出した。直径約 2.3 m の平面は円形で、深さ約 50 cm を測る(図版七-7)。ほかの大型土坑と、形状、深さ共に異なるが、検出位置は他の大型土坑と直線状に並ぶ配置にある。

S X 11 は、第 8 ~ 9 区で検出した。東西約 2.1 m、南北約 3 m の隅丸長方形で、深さ約 1.2 m を測る(図版七-8)。埋土は厚さ約 50 cm の褐色粘質土と、その下の黄褐色粘質土に分けられる。この 2 層の間に、土師器皿を中心とした遺物集積層が挟まっていた。

S X 12 は、第 8 区で検出した。南北約 3 m、東西 2.1 m 以上の隅丸長方形で、深さ約 1.2 m を測る(図版八-1)。南西部は、調査区外に広がる。埋土は、上層の厚さ約 50 cm の灰黄褐色粘質土と、下層のにびい黄色シルトの 2 層からなる。この 2 層の間に、S X 06 と同様に遺物集積が見られた。

S X 202 は、第 11 ~ 13 区で検出した。幅約 2.5 m、長さ 3 m 以上の隅丸長方形で、西端は、S X 07 に削られている(図版七-5)。深さは、約 95 cm を測る。埋土は基本的に上下 2 層に分けられる。上層は厚さ 60 ~ 80 cm の



第 19 図 大型土坑実測図 (1/150)



黄灰色粘質土、下層は厚さ約30cmの黄灰色粘質土、下層は厚さ約30cmの暗灰黄色粘質土で、その間に遺物の集積が見られた。

掘立柱建物SB 204 第3トレンチ西南部、第2トレンチとの接合地区（第13・15～16区）で検出したP 207・

312・306・334・335・

336・304からなるピットを、

掘立柱建物と捉えた（第20

図、図版8-2）。南北3間（6.3m）、東西2間（1.8m）

以上のN-3°-Wに向く建物と考えられる。南北方向の

柱間は2.1m等間で、東西は

1.8m等間になるものと思わ

れる。南北柱間の方が長いこ

とから、これを桁行きとする

南北棟と思われる。ピットは、

直径は20～30cmの円形で

ある。深さは15～35cmで、

北西隅のP 312が深く、南

西のP 336方向に浅くなる。

P 304は、梁・桁距離が合

うことから、当建物に関連す

る柱穴と考えた。深さは10

cmと浅い。埋土は灰色粘質土

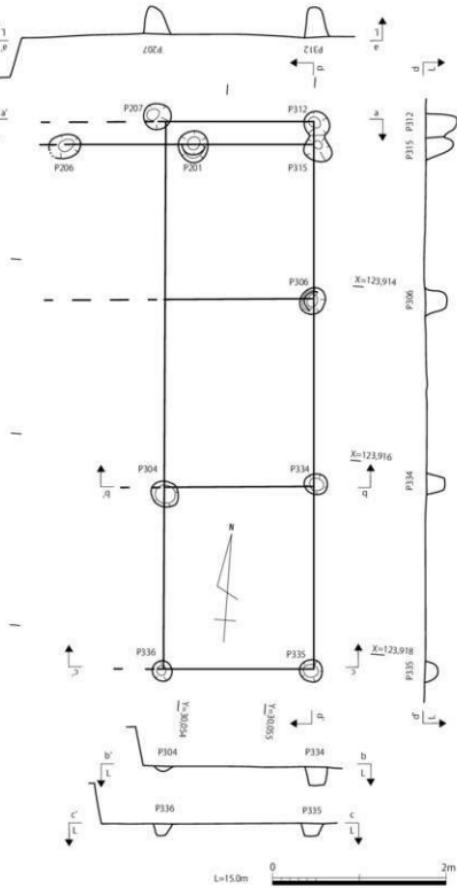
1層で、柱痕は確認できなか

った。

北辺柱列の南に接して、P 315・201・206が1.5m等間で並び、当建物の改築か、別遺構の柵になる可能性があ

る。P 312とP 315は一部

重複しているが、切り合い関



第20図 掘立柱建物SB 204 実測図 (1/50)



係は把握できなかった。各ピットは円形で、直径約30cm、深さ約30cmを測り、揃っている。

土坑SK 203 第2トレンチ北西隅（第7区）で検出した土坑である。南北幅約1.3m、東西長1.7m以上で、西は調査区外に延びる。埋土は、灰色粘質土で、径30cm前後の亜角礫が数個散在的に包含されていた（図版八一3・4）。

土坑SK 301 第3トレンチ南部（第16区）で検出した土坑で、長径約80cm、短径約70cmの楕円形土坑と、長径約70cm、短径約50cmの楕円形土坑が重複している（第21図）。前者は深さ約30cm、後者は深さ約20cmを測る。埋土は1層で、両者の先後関係はたらえきれなかった。

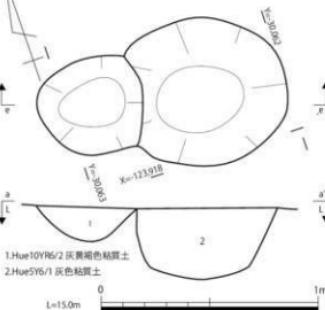
土坑SK 302 第3トレンチ東辺中央部（第14～15区）で検出した土坑である。南北約1.8m、東西約60cm以上で、東部は調査区外に広がる。深さは、約40cmを測る。埋土は大きく上下2層に分けられ、上層は厚さ約30cmの灰黄褐色粘質土、下層は厚さ約10cmの黄灰色粘質土と灰オリーブ色粘質土からなる。

土坑SK 304 第3トレンチ東辺中央部で検出した土坑である。南北約1.2m、東西40cm以上で、深さ約15cmを測る。東部は、調査区外に広がる。埋土は灰色シルト1層で、底付近に土器の集積が見られた。

ピット ピットは、第1トレンチ北半部（第2区）に隅丸方形柱穴1基（P 02）がある。ほかは、直径10～30cmの円形である。円形のピットは、第1トレンチ（第1～6区）で密に分布し、他所では散在的な検出状況であった。円形ピットのうち、P 208は、弥生時代の所産で、他は平安時代から鎌倉時代の所産である。P 01・19・305からは、ほぼ完形の土器が出土し、P 206・312からは、6～7cm角の石が出土した。

ピットP 01 第1トレンチ南部東辺（第4区）
で検出したピットである。平面形、南北約40cm、東西40cm以上の楕円形で、深さ約10cmで1段目
の底になり、その北縁部が径約10cmの円形にさ
らに約5cm深くなっていた。埋土は灰色粘質土1
層であった。当ピットの検出面で、土師器皿が重
なった状態で出土した（第23図、図版八一5）。
下の1枚はほぼ完形で、上2枚は破片となってい
たが、本来完形品であったものと思われる。出土
土師器皿から、平安時代の所産と考えられる。

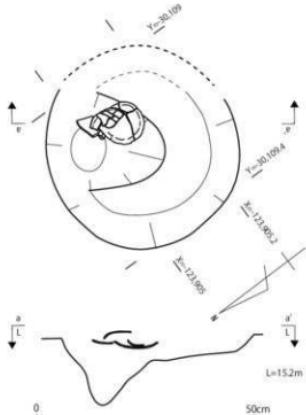
ピットP 02 第1トレンチ北部東寄り（第2
区）で検出した。一边50cm四方の隅丸方形掘形



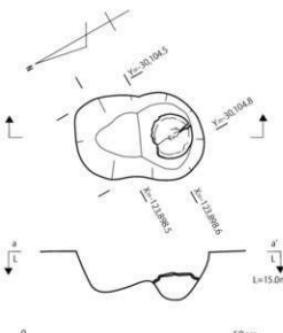
第21図 土坑SK 301 実測図(1/20)



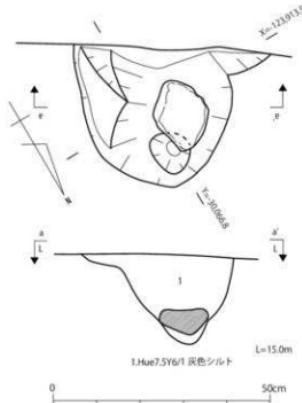
で、ほぼ中央に径約30cmの円形柱痕を持つ（第10図）。南辺は、溝SD 02に削られている。柱痕の底から縁部裏面が赤色の焼土面をなし、掘形上面や柱痕埋土には、赤橙色～黄橙色の焼土が5mm程度の塊となって包含されていた。周辺部で、関連する柱穴は検出できなかったが、焼土面の状況から、火災を受けた建造物の柱穴と考えられる。出土遺物は皆無で、時期は決め



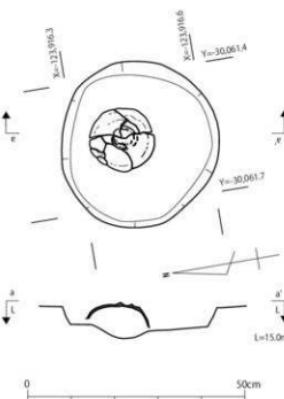
第22図 ピットP 01 土師器皿出土状況実測図 (1/10)



第23図 ピットP 19 土師器皿出土状況実測図 (1/10)



第24図 ピットP 206 石出土状況実測図 (1/10)



第25図 ピットP 305 瓦器椀出土状況 (1/10)



難いが、溝 S D 02 に削られていることから平安時代の所産と考えられる。

ピット P 19 第1トレーニングの北端東寄り（第2区）で検出したピットである。直径約15cmの円形で、深さ約10cmを測る。底面から約5cm程度上の位置から、土器皿1枚が、倒立状態で出土した（第24図、図版八-6）。出土土器から、平安時代の所産と考えられる。埋土は、灰色粘質土1層であった。南辺に接するピットP 18との先後関係は、捉えられなかった。

ピット P 206 第2トレーニング東端南辺（第13区）で検出したピットである。東西約35cm、南北約30cmの楕円形で、深さ約20cmを測る。底面近くから、扁平な亜角礫1個が出土した（第25図、図版八-7）。石材は砂岩で、砥石としての利用が考えられる。

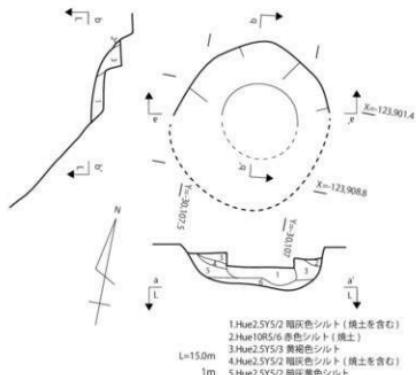
ピット P 208 第2トレーニング東部北辺（第9区）で検出したピットである。直径約30cm、深さ約10cmを測る。埋土は黄褐色粘質土1層で、弥生土器片が数点出土した。

ピット P 305 第3トレーニング南部東辺（第16区）で検出した。直径約40cm、深さ約15cmを測る。埋土は、灰色シルト1層であった。検出面から、瓦器碗が倒立して出土した（第26図、図版八-8）。瓦器碗の形式から、13世紀の所産と考えられる。

ピット P 312 第3トレーニング中央西寄り（第15区）で検出した円形のもので、直径約30cm、深さ約30cmを測る。検出面から、角礫が出土した。何かに利用されていたものを破碎して、当ピットに破棄されたものと思われる。

4. 出土遺物

出土遺物は、遺物コンテナ150箱を超えるが、その内、無差別に254,885点を整理した結果を報告する。出土遺物には、土器や瓦のほか、金属製品や石製品がある。出土遺物の所属時期には、弥生時代・古墳時代・平安時代・鎌倉時代がある。このうち、出土量が少ない弥生時代・古墳時代及び平安時代の遺物の一部は各時代の項目で報告し、遺構の時期を示す一括土器は遺構ごとに報告する。出土瓦・鉄製品・石製品は、各々別項目でまとめて報告する。



第26図 ピットP 02 実測図 (1/10)

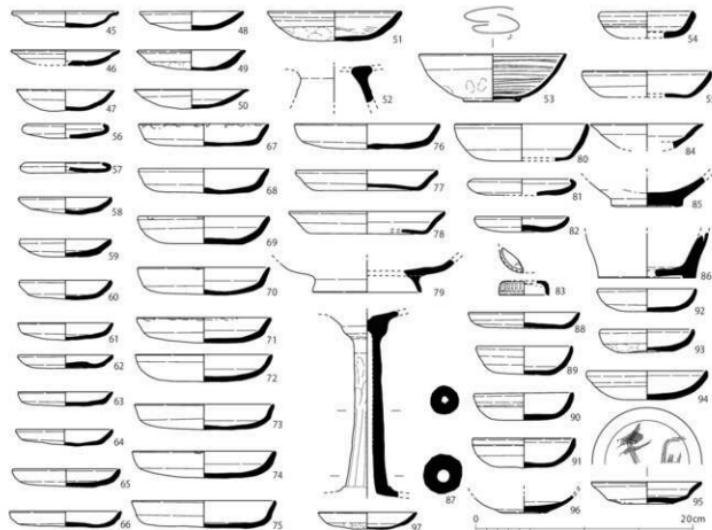


(1) 土器 (第 27・28 図、図版9~14)

弥生時代 第2トレーニング 10区ピットP 208から壺形土器部片が27点出土した。他に第2トレーニングから1点出土している。残存状況が悪いため、時期決定は難しいが、中期の所産と考えられる。

古墳時代 この時期に属する土器としては、第1トレーニング 2区溝S D 02から出土した須恵器高杯片と第1トレーニング 2区第2層から出土した須恵器杯片などがある。前者は柱状部上端片である(143)。後者は杯蓋天井部か杯身体部片になるものと思われる。いずれも小片であるため、詳細な時期決定はできないが、6世紀の所産と思われる。いずれも副次的堆積からの出土と考えられる。

平安時代 この時期に属する土器としては、須恵器・土師器・黒色土器・綠釉陶器・灰釉陶器などが出土している(141・142・144~148)。144は、第3トレーニング 14区第3層から出土した口縁部を屈曲させる形態の須恵器杯B蓋である。他に第1トレーニング溝S D 02、第2トレーニング大型土坑S X 06・S X 07・S X 10、第3トレーニング 14区第2層などからも出土している。146は、第3トレーニング 15区ピットP 306から出土した断面台形の貼り付け輪高



第27図 HS 16-1 金井戸出土遺物実測図1 (1/4)



台を持つ須恵器杯Bの底部片である。他に第3トレンチピットP 332などからも出土している。141・142は、第2トレンチ12～13区S X 202から出土した灰白色の軟質素地に透明釉がかかった縁釉陶器碗である。145は、第1トレンチ1区溝S D 01から出土した硬質素地に濃緑色に発色する釉がかかった輪花状の口縁の縁釉陶器皿である。147は、第2トレンチ7区遺物集積遺構S X 05から出土した器形不明の装飾付須恵器片で、外面は黒灰色を呈する。148は、第2トレンチ13区第3層から出土した灰釉陶器皿であり、断面三日月型の貼り付け高台を有する。

このほか、土師器杯A・杯B・甕A、須恵器壺、黒色土器A類杯・B類椀が出土している。土師器は、土杯Aが第2トレンチピットP 207から、杯Bが第3トレンチピットP 332から、甕Aが第1トレンチ溝S D 02や第2トレンチ11区第3層から出土した。須恵器は、壺が第2トレンチ遺物集積遺構S X 04・大型土坑S X 06・202から出土している。黒色土器は、A類杯18点、B類椀94点が出土した。

平安時代の土器の内、須恵器杯Bや須恵器蓋、土師器杯A・B、黒色土器A類杯などは、8世紀末～9世紀の所産が含まれ、黒色土器B類椀などは10世紀の所産と思われる。黒色土器B類椀に共伴する土師器皿は明確でないが、次に述べる土師器皿Aに伴うものが含まれているものと思われる。

ピット出土の土器 土師器は、ピット内から皿316点・煮炊具12点・盤などの盛りつけ形態2点・器形不明9点が出土した。皿には、口縁部を外反させた皿A、平坦な底部から鋭く折り返す口縁部をもつコースター形態の皿A c、底部から内湾して立ち上がる口縁部をヨコナデしてそのまま端部を丸くおさめた皿N、台付皿(52)がある。皿Aは39点、皿Nは71点、皿A cは2点、台付皿は1点ある。皿Aには、端部を内側に丸く肥厚させた皿A a(45・46・149～151)、口縁部を外反させて端部が肥厚せず丸くおさめた皿A b(47～51)がある。皿A bには大小があり、小型の口径平均値は9.5cm、径高指数平均は17.7で、大型は口径12.8cm、径高指数21.1の個体(50)がある。皿Aを除く土師器皿には、色調が黄褐色のもの(以下、「黄褐色系土師器皿」という。)が273点、色調が灰白色のもの(以下、「白色系土師器皿」という。)が4点ある。

土師器以外には、瓦器碗69点、鍋羽金類5点、内面のみ黒色の黒色土器A類1点、器全体を黒色に焼き上げた黒色土器B類9点、須恵器7点が出土している。瓦器碗(52・152)は、底部に断面三角形の低い形骸化した高台を巡らしている。52は、口縁端部をまるくおさめ、内面に粗いヘラミガキを施し、内面見込みに連弧状ヘラミガキを施す。須恵器は、杯・壺・甕がある。黒色土器A類、土師器煮炊具及び盛りつけ形態、須恵器などは9世紀の所産と思われ、混入品と考えられる。土師器皿Aや黒色土器



B類椀などは、11世紀～12世紀にかけての、皿N・A c・台付皿・瓦器椀などは13世紀の所産と考えられる。

溝S D 01 出土土器 土師器は240点出土しており、器種は皿A 3点、黄褐色系皿208点、白色系皿11点、煮炊具18点である。黄褐色系土師器皿には、口縁部4分の1以上ある個体に皿Nが2個体あり、大小の区分がある。白色系皿にはA cが1点ある。

瓦器は17点、綠釉陶器は1点、須恵器は2点出土している。瓦器は全て椀形態(161)で、須恵器には杯1点と壺1点がある。綠釉陶器・須恵器は、平安時代の所産と思われる。

溝S D 02 出土遺物 土師器は2,546点出土しており、器種は煮炊具25点、皿A 5点、皿A c 10点、皿N 696点がある。皿N・A cには、黄褐色系皿2,694点、白色系皿111点がある。黄褐色系皿Nには、大小の区分がある。口縁部4分の1以上の個体数では、大型品は4個体あり、口径平均13.3cm、径高指数平均17.9、小型品は8個体あり、口径平均8.6cm、径高指数平均15.8を測る。A cは2個体ある。

瓦器は椀98点(220・222)、羽釜1点の計99点、黒色土器はA類4点、B類7点の計11点、白磁は碗1点、皿1点の計2点、灰釉陶器は壺1点出土している。須恵器の食膳形態のものは、先述した古墳時代の高杯(143)のほか杯1点、杯B蓋1点があり、貯蔵形態のものには、壺2点、甕4点、器形不明3点があり、計12点出土している。須恵器食膳形態や貯蔵形態及び黒色土器A類は9世紀、土師器皿Aと黒色土器B類は11～12世紀、他は13世紀の所産と考えられる。

溝S D 03 出土土器 土師器17点、瓦器7点、黒色土器1点、須恵器1点出土している。土師器は皿N 1点と皿A c 1点があり、いずれも黄褐色系皿であるが、口縁部4分の1以上ある個体はない。瓦器は全て椀であり、黒色土器は全てB類の椀である。須恵器は形態不明品である。須恵器は平安時代、黒色土器は11～12世紀の所産と考えられる。

遺物集積遺構S X 04 出土土器 土師器は3,257点出土しており、器種は黄褐色系皿2,930点、白色系皿316点、煮炊具5点、器形不明5点がある。皿には黄褐色系皿N 987点、同A c 2点、白色系皿Nと器形が深い皿Sを合わせて53点がある。皿Nには大小の区分がある。口縁部4分の1以上ある個体には、大型品6個体あり、口径平均12.4cm、径高指数平均17.8で、小型品13個体あり、口径平均8.8cm、径高指数平均14.0を測る。

瓦器は椀30点、煮炊具1点の計31点、黒色土器はA類2点、B類2点の計4点、須恵器は杯2点、壺1点、甕2点の計5点が出土している。黒色土器と須恵器は平安時代の所産で、他は13世紀の所産と考えられる。

遺物集積遺構S X 05 出土土器 土師器は2,215点出土しており、器種は黄褐色系2,111点、白色系91点、盛り付け形態2点、煮炊形態8点、器形不明3点がある。黄橙色系皿Nには、



大小の区分がある。口縁部4分の1以上ある個体には、大型品6個体あり、口径平均13.5cm、径高指数16.8、小型品5個体あり、口径平均8.4cm、径高指数16.5を測る。

瓦器は椀32点、煮炊具2点の計34点、黒色土器はA類1点、B類1点の計2点、白磁は皿2点、須恵器は杯2点、壺3点、甕8点、器形不明1点の計14点が出土している。黒色土器A類と須恵器は9世紀、黒色土器B類は11～12世紀、他は13世紀の所産と考えられる。

大型土坑S X 06 出土土器 土師器は138,531点出土しており、器種は皿A 2点、台付皿1点、盛り付け形態1点、煮炊形態14点、黄褐色系皿131,493点、白色系皿7,008点、白色系高杯1点、器形不明品11点がある。黄褐色系土師器皿には、皿N（58～64・67～78）と皿A c 6個体（56・57）がある。皿Nには大小の区分がある。大型品の58個体（67～78）は口径平均13.0cm、径高指数平均17.7、小型品55個体（58～64）は口径平均8.9cm、径高指数平均16.0を測る。白色系皿には、皿Nが17個体（65・66・82）、深い器形の皿S大型が2個体（80）、皿A cが2個体（81）ある。皿Nの口径平均は9.5cm、径高指数は16.0を測る。

瓦器は椀98点、皿1点、鉢1点、煮炊具4点の計104点、黒色土器はA類3点、B類2点の計5点、青磁は皿2点の計2点、白磁は椀6点、皿1点（223）の計7点、灰釉陶器は食膳形態1点、不明陶磁器は壺7点、須恵器は杯類6点、杯B蓋3点、壺3点、甕11点、鉢2点、器形不明1点の計26点がある。須恵器食膳形態や甕・壺、黒色土器A類は9世紀、土師器皿Aや黒色土器B類は11～12世紀、他は13世紀の所産と思われる。

大型土坑S X 07 出土土器 土師器は39,957点出土しており、器種は皿Aが1点、黄褐色系皿38,207点、白色系皿1,740点、白色系高杯1点、煮炊形態5点、器形不明3点がある。黄色系土師器皿には、皿A c 14個体（214・218）、皿N 223個体（155～173・185～198）、器形が深い皿S 4個体（92～94）がある。皿A cは口径平均8.2cm、径高指数平均14.2を測る。皿Nには大小の区分がある。大型品103個体（185～198）は、口径平均13cm、径高指数平均19.1、小型品120個体（155～173）は、口径平均8.9cm、径高指数平均15.4を測る。皿Sには大小があり、小型品の3個体は、口径平均9cm、径高指数平均24.2を測る。皿A cは、口径平均8.6cm、径高指数平均15.8を測る。

瓦器は椀45点、皿1点、煮炊具2点の計48点、黒色土器はB類1点の計1点、青磁は皿2点（95・224）、碗1点（225）の計3点、白磁は皿2点（96）、不明陶磁器1点、須恵器は杯B蓋1点、壺1点、鉢1点、器形不明1点の計4点が出土している。須恵器杯B蓋・壺は9世紀、土師器皿Aと黒色土器は11～12世紀、他は13世紀の所産と思われる。

遺物集積遺構S X 08 出土土器 土師器は3,241点出土しており、器種は皿A 2点、黄褐色系皿3,078点、白色系皿152点、煮炊具9点である。黄褐色系皿には、皿Nが24個体（176



～179)と皿A cが1個体ある。皿Nには大小の区分がある。大型品(199)は口径平均12.8cm、径高指数平均17.4、小型品(176～179)は口径平均8.8cm、径高指数平均17.4を測る。白色系皿には、皿Nが1個体と皿Sが1個体ある。

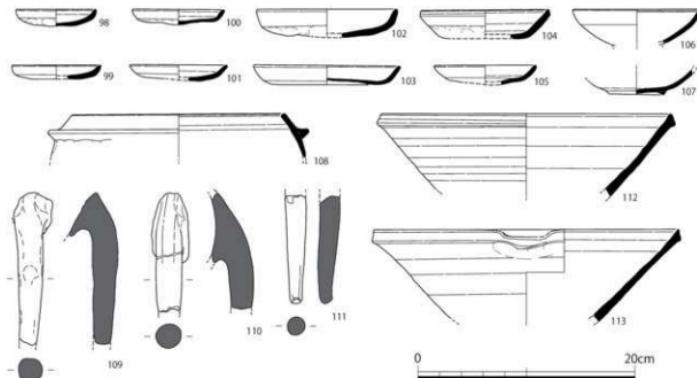
瓦器は碗31点、黒色土器はB類1点、青磁は碗1点、不明陶磁器は壺1点、須恵器は壺1点、鉢1点の計2点が出土している。黒色土器や須恵器壺は平安時代の所産で、他は13世紀の所産と考えられる。

遺物集積遺構S X 09出土遺物 土師器は黄褐色系皿130点(98～104)、煮炊具25点の計155点、瓦器は椀169点(106～107)、皿2点(105)、煮炊具24点があり、煮炊具のうち羽釜とわかるものは17点(108～111)、鍋1点の計213点、須恵器は壺4点、鉢27点(112～113)の計31点がある。

他の遺構出土土器組成と比べて、瓦器と須恵器の出土量が多く、瓦器煮炊具と須恵器調理具の存在が特異な要素と言える。瓦器鍋と識別できる破片は、当遺構出土の1点のみで、特筆できる。いずれも13世紀の所産である。

大型土坑S X 10出土土器 土師器3,298点、瓦器3点、白磁2点、須恵器1点出土しており、土師器の器種は、黄褐色系皿3,234点、白色系皿61点、煮炊具1点、器形不明2点である。黄褐色系皿には皿N・S・A cがあり、白色系皿には皿N・Sがある。

大型土坑S X 11出土土器 土師器は17,663点出土しており、器種は皿A 1点、黄褐色系皿16,576点、白色系皿1,079点、煮炊具6点、器形不明品1点である。黄褐色系皿には、皿Nが123個体、皿A c(215)が6個体ある。皿Nには、大小の区分がある。大型品(200-



第28図 HS 16-1 金井戸出土遺物実測図2 (1/4)



201) は 42 個体あり、口径平均 12.6cm、径高指數平均 18.4 で、小型品 (180 ~ 184) は 81 個体あり、口径平均 8.7cm、径高指數平均 16.1 を測る。皿 A c は、口径平均 9.6cm、径高指數平均 14.3 を測る。白色系皿には、皿 S・N がある。皿 S には、大小の区分がある。大型品 (219) は 4 個体あり、口径平均 12.9cm、径高指數平均 23.7、小型品は 3 個体あり、口径平均 9.3cm、径高指數平均 25.1 を測る。皿 N (212) は 8 個体あり、口径平均 9.8cm、径高指數平均 15.9 を測る。

瓦器は椀 28 点、黒色土器は A 類 1 点、B 類 1 点の計 2 点、青磁は碗 1 点、須恵器は甕 4 点出土している。黒色土器 A 類や須恵器は 9 世紀、黒色土器 B 類は 11 ~ 12 世紀の所産と考えられ、他は 13 世紀の所産と考えられる。

大型土坑 S X 12 出土土器 土師器は 1,480 点出土しており、器種は黄褐色系皿 1,433 点、白色系皿 44 点、煮炊具 3 点がある。黄褐色系皿には、皿 N 299 点、皿 A c 3 点がある。口縁部片が 4 分の 1 以上あるものは、皿 N 大が 3 個体あり、口径平均 13.2cm、径高指數 15.2 を測る。

瓦器は椀 11 点、須恵器は甕 1 点が出土している。須恵器を除き、13 世紀の所産と考えられる。

溝 S D 201 出土土器 土師器は皿 A 1 点、黄褐色系皿 11 点、煮炊具 1 点の計 13 点、瓦器は椀 1 点、黒色土器は B 類 2 点が出土している。土師器皿 A と黒色土器は 11 ~ 12 世紀、他は 13 世紀の所産と思われる。

大型土坑 S X 202 出土土器 土師器は 32,427 点出土しており、器種は皿 A 1 点、黄褐色系皿 29,882 点、白色系皿 2,524 点、煮炊具 14 点、器形不明品 6 点である。黄褐色系皿には皿 A c が 5 個体、皿 N が 69 個体、皿 S (54) が 2 個体ある。皿 A c は口径平均 8.0cm、径高指數平均 14.9 を測る。皿 N には、大小の区分がある。大型品 (55・202 ~ 204) は 32 個体あり、口径平均 13.0cm、径高指數平均 18.0、小型品 (174・175) は 37 個体あり、口径平均 8.8cm、径高指數平均 15.4 を測る。白色系皿には、皿 N が 8 個体、皿 S が 5 個体、皿 A c が 4 個体ある。皿 N (213) は口径平均 9.1cm、径高指數平均 16.8 を測る。皿 S は、口径平均 12.6cm、径高指數平均 25.3 を測り、大型品である。皿 A c は、口径平均 8.9cm、径高指數平均 14.4 を測る。

瓦器は椀 25 点、煮炊具 5 点の計 30 点、黒色土器は A 類 2 点、青磁は碗 (226) 3 点、綠釉陶器は碗 (141・142) 2 点、須恵器は甕 5 点が出土している。土師器煮炊具、綠釉陶器、黒色土器、須恵器は平安時代、他は 13 世紀の所産と思われる。

土坑 S K 203 出土土器 土師器 9 点、瓦器 2 点が出土した。土師器は黄褐色系皿、瓦器は椀である。13 世紀の所産である。

土坑 S K 301 出土土器 土師器は黄褐色系皿 98 点、器形不明 1 点の計 99 点、瓦器は椀 7



点、須恵器は甕 2 点が出土した。須恵器を除き、13 世紀の所産と思われる。

土坑 S K 302 出土土器 土師器は黄褐色系皿 8 点と煮炊具 1 点の計 9 点、瓦器は椀 4 点が出土した。13 世紀の所産である。

土坑 S K 304 出土土器 土師器は黄褐色系皿 560 点、白色系皿 11 点、器形不明 1 点の計 572 点、瓦器は椀 4 点、須恵器は鉢 1 点が出土した。13 世紀の所産である。

(2) 瓦類（第 29・30 図、図版一〇～一二・一四）

瓦類の総破片数は 1,881 点あり、このうち軒丸瓦は 40 個体、軒平瓦は 59 個体、ヘラ記号のある瓦は 21 個体である。

軒丸瓦 巴文 28 個体と宝相華文 6 個体がある。

宝相華文は、1 型式同範 1 種のみである（124）。平安京からも同型式の宝相華文が、平安宮⁽⁶⁾、六勝寺⁽⁷⁾、右京六条一坊六町⁽⁸⁾、左京六条三坊五町⁽⁹⁾、左京四条一坊十二・三町⁽¹⁰⁾、西山廃寺⁽¹¹⁾、常盤仲ノ町遺跡⁽¹²⁾、相国寺旧境内⁽¹³⁾などから出土例の報告があり、同範も含まれていると思われる。出土量はいずれも 1 ~ 数個体で散在的な消費であるが、広瀬遺跡の場合は過去の調査出土数を合わせて 13 個体ある。のことから、広瀬遺跡はこの型式同範瓦の平安京内消費量に匹敵する主要消費地と言える。

巴文には、外区内線に珠文を配するもの（114 ~ 121）と、無いもの（122・123）がある。前者には、内外区界に凸界線を配するもの（114・116 ~ 119）と無いもの（115）がある。凸界線が無いものには、右巴文（121）と左巴文（114 ~ 120）があり、凸界線があるものはすべて左巴文である。外区内線がないものは、すべて左巴文である。

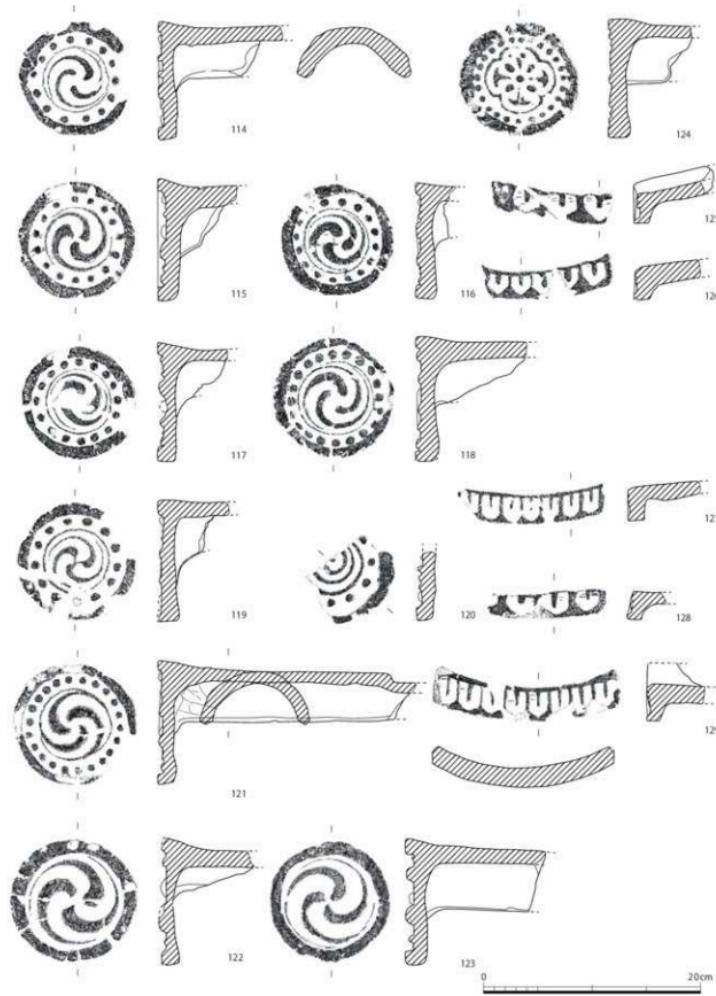
軒平瓦 均整唐草文と剣頭文がある。

均整唐草文には主葉・子葉とも先太りに表現されたもの（137・139）と、主葉・子葉とも中太りで連弧状に表現が簡略され、水波文の祖形化したもの（138）がある。前者には 93 と 95 との 2 型式がある。後者はすべて同範で、法住寺殿跡⁽¹⁴⁾、平安京左京八条四坊四・五町⁽¹⁵⁾、西山廃寺⁽¹⁶⁾、常盤仲ノ町遺跡⁽¹⁷⁾、相国寺旧境内⁽¹⁸⁾などから出土している。

剣頭文には、中心飾りに菊花文を配したもの（135）、巴文を配したもの（134・228）、連珠文を配したもの（132）、中心飾りを配さないもの（125 ~ 131）がある。

菊花剣頭文は、京都市常盤仲ノ町遺跡⁽¹⁹⁾などから出土している。巴剣頭文には中心飾りの巴が右巴（228）と左巴（134）の 2 種がある。連珠剣頭文は、平安京左京三条二坊十町⁽²⁰⁾から、同範と思われるものが出土している。

剣頭文には、左第 1 単位に × を加飾したもの（136）、左第 1 単位のさらに左に四角の刻印を加飾したもの（125）、右第 1 単位に範傷の木目圧痕が階段状にみられるもの（128）などがある。



第29図 H 5 16-1 金井戸出土瓦実測図1 (1/4)



ヘラ記号瓦 ヘラ記号が刻まれた丸瓦 13 個体・平瓦 8 個体がある。

丸瓦のヘラ記号には、玉縁部凸面に平行する 2 本線を斜めに刻したもの、本体部凸面に平行する 2 本線を刻したもの、本体凸面に交差する直線を刻したものなどがある。これらはそれぞれに、刻まれた直線の曲がり具合や筆圧などに共通する特徴がみられる。

平瓦の線刻には、軒平瓦凸面に平行する 2 本線を刻したもの、軒平瓦凸面に交差する直線を刻したもの、軒平瓦凹面に直行する直線を刻したもの（133）、軒平瓦凹面に平行する直線または直線と曲線を刻したもの（138・140）、平瓦凸面に交差する直線を刻したものがある。

丸瓦 幅約 11cm を測るものが多い。凹面には布目压痕、凸面ナデ、側面ヘラ削り整形で、凹面にコビキ跡を残すものもある。

平瓦 前部上弦幅約 15cm、弧深約 1.5cm、長さ約 21cm で、凹面に布目压痕を残し、コビキ跡がみられるものもある。また凸面に斜格子叩きを施すものや、凹面と凸面の両面を丁寧なナデ調整するものも少量存在する。

（3）石製品

石製品には、8 区第 3 層から出土した石鍋（232）、14 区第 3 層から出土した砥石（231）、S X 202 から出土した砥石か硯と思われるもの（233）、ピット P 206 から出土した根石がある。232 の石鍋は滑石製で、幅約 8cm、高さ約 3.5cm の体部下端片である。231 は風化した流紋岩製で、長辺約 9.5cm、短辺約 8cm、厚さ約 4.5cm を測る。233 は頁岩製で、幅約 5.4cm、長さ約 5.5cm、高さ約 0.8cm を測る。根石は玢岩製で、長辺約 13.5cm、短辺約 14cm、厚さ約 5.6cm を測る。

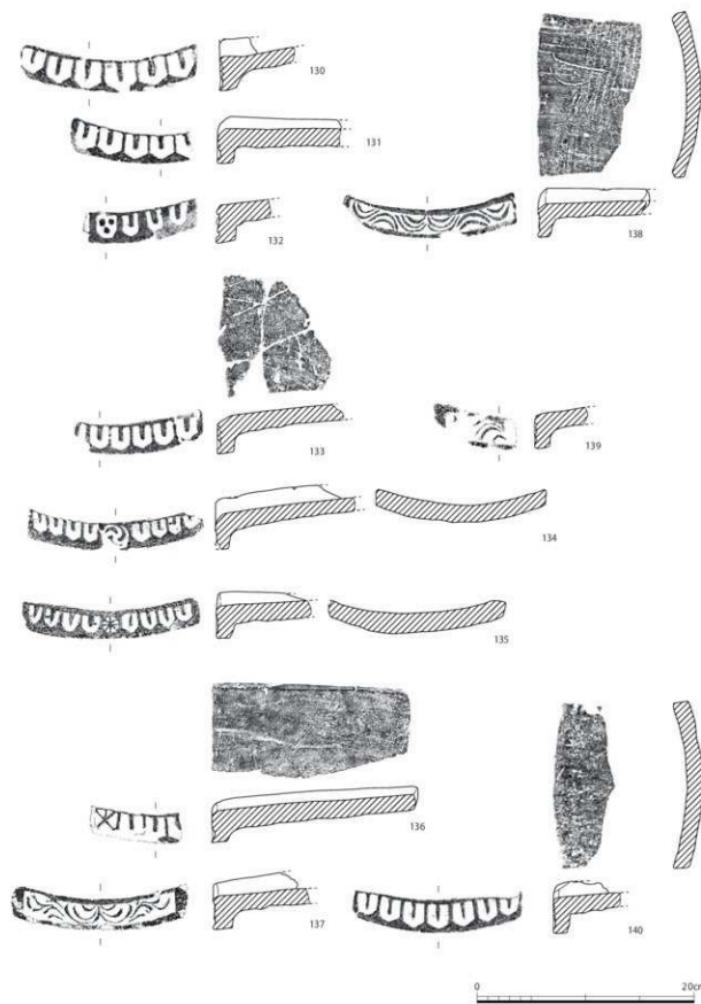
（4）鉄製品

鉄製品には、釘、刀、不明鉄製品などがある。釘は、溝 S D 01 から 1 点、溝 S D 02 から 26 点、遺物集積遺構 S X 05 から 3 点、大型土坑 S X 06 から 22 点、大型土坑 S X 07 から 2 点、遺物集積遺構 S X 08 から 3 点、大型土坑 S X 11 から 10 点、大型土坑 S X 202 から 13 点、ピット P 332 から 2 点、その他包含層などから 13 点が出土している。刀は、7 区第 3 層と 11 区第 3 層から出土した。遺物集積遺構 S X 08 から、風鐸の舌か火打ち金と思われるものが出土した。

5.まとめ

検出された大型土坑群は土師器皿 A に代表される 11 世紀～12 世紀に、円形ピットの一部は、瓦器椀や土師器皿 N の時期、つまり 13 世紀に比定できると考えられる。掘立柱建物は、ほぼ南北方向に棟を持ち、現存地割の方位と沿わない。

遺構からの出土遺物組成をみると、遺物集積遺構 S X 05 からの瓦出土割合が 34.1% と、他の遺構に比して抜きん出て多い。遺物出土量の多い他の遺構からの瓦出土割合は、5 % を超



第30図 H5 16-1 金井戸出土瓦実測図2 (1/4)



えない。遺物集積遺構 S X 09 では、瓦器（53.4%）と須恵器（7.8%）の出土割合が極端に多い。器形では、瓦器煮炊形態（羽釜・鍋）と須恵器調理形態（鉢）が一定量出土していることに特徴がある。瓦器の出土割合が 10% を超える遺構には、溝 S D 03・土坑 S K 203・土坑 S K 302 があるが、いずれも遺物出土量の少ない遺構であり、誤差が大きくなつたものと考えられる。ほとんどの遺構で、瓦器の出土割合は 7 % を超えない。大多数の遺構では、土師器の出土量が 90% を超えている。これらのことから、遺物集積遺構 S X 05 は建物解体に伴う廃棄遺構、遺物集積遺構 S X 09 は厨などの廃棄物処理遺構と考えられる。

13世紀の出土遺物をみると、黄褐色系土師器皿の N 形態には、口縁部を単純に丸くおさめた b 形態と、端部を外傾させて丸くおさめるかまたは狭い端面を持つ a 形態がある。法量には大小の区分があり、小型は口径平均 8.8cm、径高指数平均 15.8 を測り、大型は口径平均 12.9cm、径高指数 18.4 を測る。S 形態は、径高指数 25 以上の深いものとした。白色系皿の N 形態には大小の差ではなく、口径平均 9.5cm、径高指数平均 16.9 を測る。S 形態には大小の区分があり、小型は口径平均 9.3cm、径高指数平均 24.4 を測り、大型は口径平均 12.4cm、径高指数平均 24.9 を測る。各遺構の法量および総計でのここに示した数値をそれぞれ比較して、各遺構出土土師器皿の法量に大きな差は認められない。このことは、それぞれの遺構ごとに大きな時期が無いことを示しており、ごく短期間に、大量の土器を廃棄したと考えざるをえない。

出土遺物で圧倒的に多いのは土師器で 251,204 点あり、99.4% を占める。瓦器は 1,270 点で 0.5% しかない。また、土師器皿では、黄褐色系皿と白色系皿があり、前者が 237,450 点で 94.6% を占め、後者は 13,536 点で 5.4% にとどまる。瓦器の消費量が少ないと白色系土師器皿が一定量消費されていることは、一般的な中世集落の在り方とは明らかに一線を画しているが、輸入陶磁器の出土量は、非常に少ない。

【註】

- (1) 久保 直子『島本町文化財調査報告書』第 19 集 島本町教育委員会 平成 24 年
- (2) 井上 正雄『大阪府全志』巻之三 大阪府全志発行所 大正 11 年
- (3) (1) 同
- (4) 木村、紀友『島本町文化財調査報告書』第 41 集 島本町教育委員会 令和 4 年
- (5) パリノ・サーヴェイ株式会社 芦 康男「広瀬道路の自然科學分析」『島本町文化財調査報告書』第 24 集 島本町教育委員会 平成 26 年 第 14 国道跡周辺の地形分析図による。
- (6) 綱 伸也・鈴木 久男『平安宮内裏』『平安京跡発掘調査概報』昭和 63 年度 京都市文化観光局 平成元年 1989 年
- (7) 吉村 正親・竜子 正彦『六勝寺(93 K S 173)』『京都市内遺跡立会調査概報』平成 5 年度 京都市文化観光局 平成 6 年 1995 年
上村 和直 他「円勝寺跡・成勝寺跡・白川街区・岡崎跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2014-13 公益財團法人 京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- (8) 平尾 正行・山口 真 他「平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2002-6 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2002 年
- (9) 尾藤 徳行 他「平安京左京六条三坊五町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2005-8 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2005 年
- (10) 大目立 一 他「平安京左京四条一坊十二・十三町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2006-33 財



- 団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007 年
- (11) 江谷 寛「西山廃寺（足立寺）の発掘調査」『同志社大学歴史資料館調査研究報告』第9集 南山城の古代寺院 同志社大学歴史資料館 2010 年
- (12) 高橋 肇・加納 敬二 他 「常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2010-15 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2011 年
- (13) 浜中 有紀 他 「相国寺旧境内発掘調査報告書」『同志社大学歴史資料館調査研究報告』第13集 同志社大学歴史資料館・公益財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2015 年
- (14) 芝野 康之 他 「法住寺跡」『平安京跡研究調査報告』第13号 財團法人古代学協会 昭和59年（1984年）
- (15) 木下 保明・近藤 章子 他 「平安京左京八条四坊四・五町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2006-20 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2007 年
- (16) 江谷 寛「西山廃寺（足立寺）の発掘調査」『同志社大学歴史資料館調査研究報告』第9集 南山城の古代寺院 同志社大学歴史資料館 2010 年
- (17) 高橋 肇・加納 敬二 他 「常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2010-15 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2011 年
- (18) 浜中 有紀 他 「相国寺旧境内発掘調査報告書」『同志社大学歴史資料館調査研究報告』第13集 同志社大学歴史資料館・公益財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2015 年
- (19) 鈴木 廣司 他 「常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告 日本電信電話公社嵯峨野社宅新築に伴う埋蔵文化財発掘調査」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』III 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 1978 年
- 前田 義明・尾藤 徳行 他 「常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2008-3 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2008 年
- (20) 加納 敬二 他 「平安京左京三条二坊十町（堀川院）跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2007-17 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 2008 年



報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいこうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	広瀬遺跡範囲確認調査概要報告
卷次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第45集
編著者名	木村 友紀、岩崎 誠、久保 直子、賀納 章雄、坂根 瞬
編集機関	島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 TEL.075-961-5151
発行年月日	令和5年3月31日

所収遺跡名	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	道番号			(m ²)		
ひろせいせき 広瀬遺跡 (HS 15-1 金井戸)	しまもとちょうひろせ 島本町広瀬一丁目 936番外4丁目	27301	14	34° 53' 03"	135° 40' 20"	2015.8.28 ~ 2015.10.19	730.0	宅地造成工事に 伴う発掘調査
ひろせいせき 広瀬遺跡 (HS 15-2 金井戸)	しまもとちょうひろせ 島本町広瀬一丁目 938番2	27301	14	34° 53' 03"	135° 40' 20"	2015.11.16 ~ 2015.12.16	259.5	宅地造成工事に 伴う範囲確認調 査
ひろせいせき 広瀬遺跡 (HS 16-1 金井戸)	しまもとちょうひろせ 島本町広瀬一丁目 944番外3筆	27301	14	34° 53' 03"	135° 40' 20"	2016.6.10 ~ 2016.7.22	320.9	宅地造成工事に 伴う範囲確認調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
ひろせいせき 広瀬遺跡 (HS 15-1 金井戸)	集落	平安時代 鎌倉時代	ビット・土坑・溝	土師器・須恵器・ 黒色土器・瓦器・ 縄輪陶器・灰釉 陶器・輸入陶磁器・ 瓦・金属製品・ 石製品	平安時代及び鎌倉時代の遺構を検出し、 平安時代の溝からは土馬が出土した。			
ひろせいせき 広瀬遺跡 (HS 15-2 金井戸)	集落	平安時代 鎌倉時代	ビット・土坑・ 溝	土師器・須恵器・ 黒色土器・瓦器・ 縄輪陶器・灰釉 陶器・輸入陶磁器・ 瓦・金属製品・ 石製品	平安時代及び鎌倉時代の遺構を検出し、 土馬や古代の瓦なども出土した。			
ひろせいせき 広瀬遺跡 (HS 16-1 金井戸)	集落	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代	ビット・土坑・ 溝・掘立柱建物・ 遺物集積遺構	弥生土器・須恵 器・土師器・瓦器・ 輸入陶磁器・陶器・ 瓦・鉄製品・ 石製品	鎌倉時代の遺構群から膨大な量の土師器 を中心とする土器類のほか、軒瓦を含む 瓦類・鉄釘や刀先などの鉄製品・砥石や 石鍋などの石製品が出土した。			



図 版







図版
HS
15
1
金井戸検出遺構



1 1・4地区第3遺構面溝 S D 201 (西から)



5 5地区第3遺構面ピット周辺 (西から)



2 2地区第3遺構面 (北から)



6 6地区第3遺構面 (北から)



3 3地区第2遺構面 (北から)



7 7地区第2遺構面 (北から)



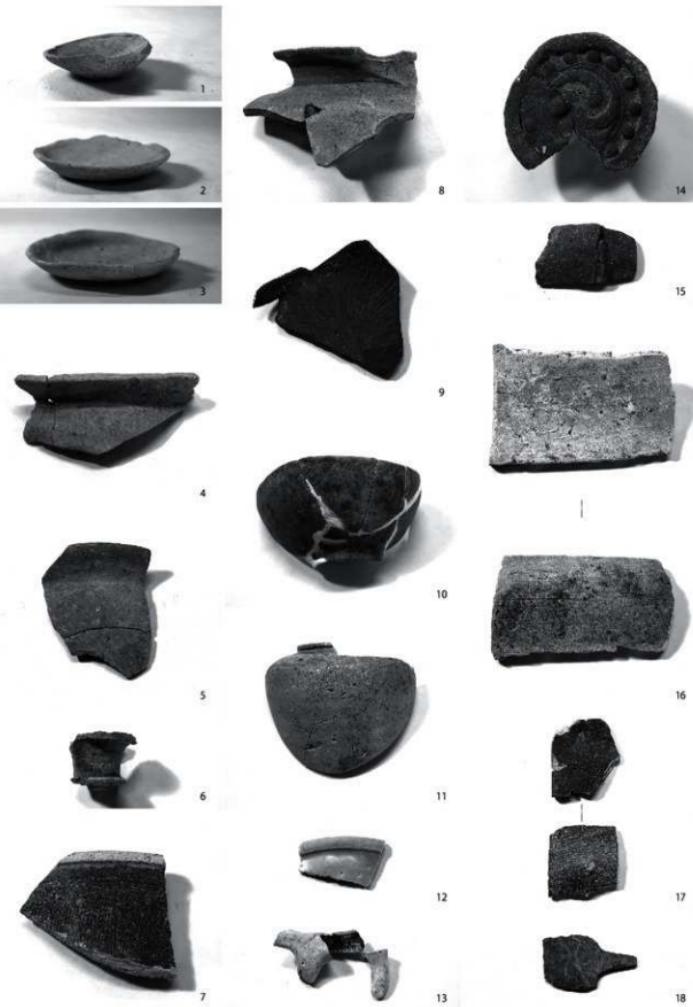
4 3地区第3遺構面、6地区第2遺構面 (北から)



8 7地区第3遺構面 (北から)



図版一 HS15-1 金井戸出土遺物





図版二
HS15-2
金井戸検出遺構



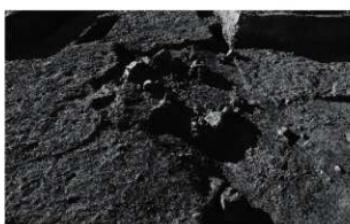
1 2地区第2遺構横面（西から）



5 土器溜まり（南から）



2 3地区第2遺構横面（南から）



6 SX 101（南から）



3 集石（南から）



7 SX 101 遺物出土状況（南から）



4 3地区第3遺構横面（南から）



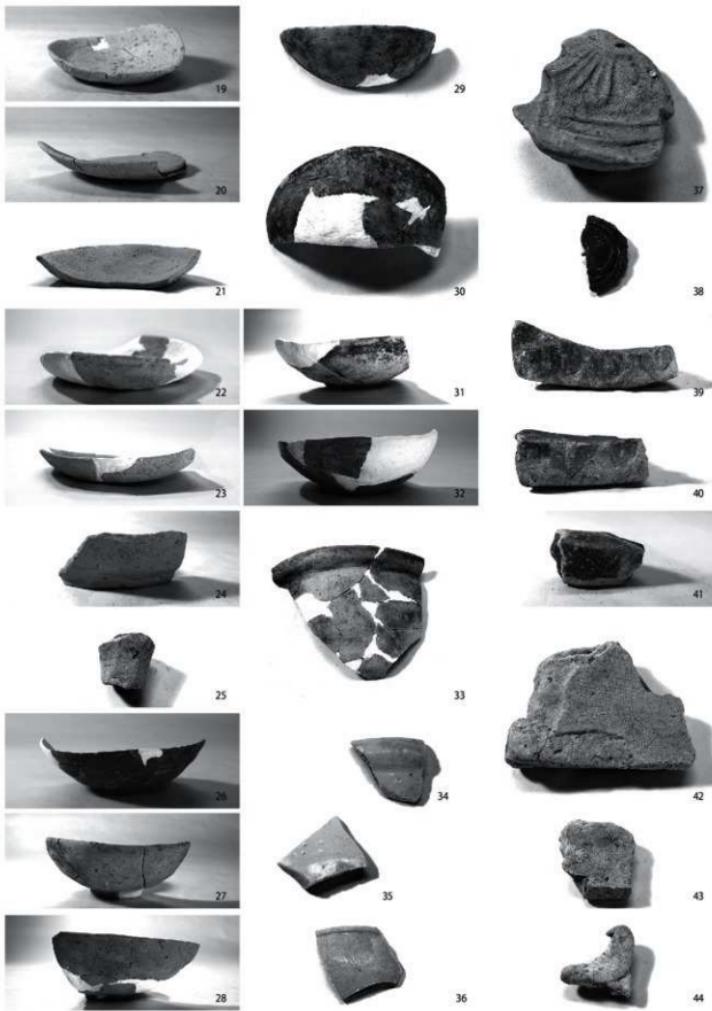
8 P 121（東から）



図版四

HS
15—2

金井戸出土遺物





図版 HS 16-1
金井戸検出遺構（一）



1 第1トレンチ全景（南西から）



5 第3トレンチ全景（北東から）



2 第1トレンチ（北東から）



6 第3トレンチ全景（西から）



3 第2トレンチ全景（北西から）



7 第2トレンチ遺物集積遺構SX 04 遺物出土状況
(北から)



4 第2トレンチ全景（南東から）



8 第2トレンチ遺物集積遺構SX 05（南東から）



図版
六

H S
16—1

金井戸
検出遺構

(一)



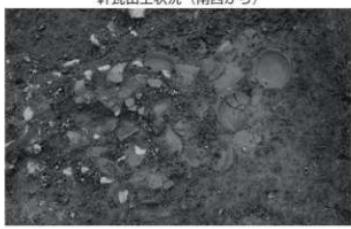
1 第2トレンチ遺物集積遺構S X 05 東端
土師器皿出土状況（東から）



5 第2トレンチ遺物集積遺構S X 05 東部
軒瓦出土状況（南西から）



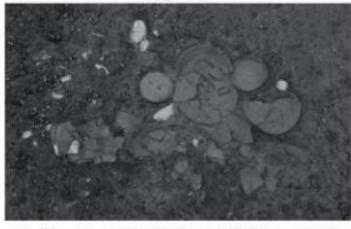
2 第2トレンチ遺物集積遺構S X 05 中央部
(北東から)



6 第1トレンチ溝S D 02 内遺物集積遺構S X 08
(南から)



3 第2トレンチ遺物集積遺構S X 05 中央部
軒瓦出土状況（南西から）



7 第1トレンチ溝S D 02 内遺物集積遺構S X 08
(北から)



4 第2トレンチ遺物集積遺構S X 05 西部(北東から)



8 第2トレンチ大型土坑群（西から）



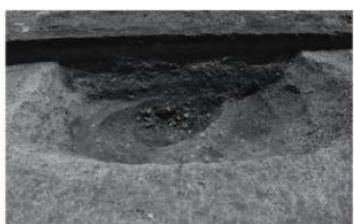
図版 H.S. 16-1
金井戸検出遺構 (三)



1 第2トレンチ大型土坑S X 06 棲出状況（北から）



5 第2トレンチ大型土坑S X 07・S X 202（東から）



2 第2トレンチ大型土坑S X 06（北から）



6 第2トレンチ大型土坑S X 07・S X 202 堆積土層
(北から)



3 第2トレンチ大型土坑S X 07・S X 202（南西から）



7 第2トレンチ大型土坑S X 10（北西から）



4 第2トレンチ大型土坑S X 07・S X 202(南西から)



8 第2トレンチ大型土坑S X 11（北から）



図版八
HS 16-1

金井戸検出遺構
(四)



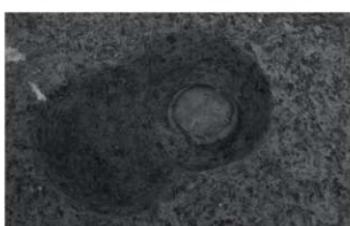
1 第2トレーニチ大型土坑S X 12（北から）



5 第1トレーニチピットP 01 土器出土状況（南東から）



2 第3トレーニチ掘立柱建物SB 204（南から）



6 第1トレーニチピットP 19 土器出土状況（西から）



3 第2トレーニチ土坑SK 203（東から）



7 第2トレーニチピットP 206 石出土状況（西から）



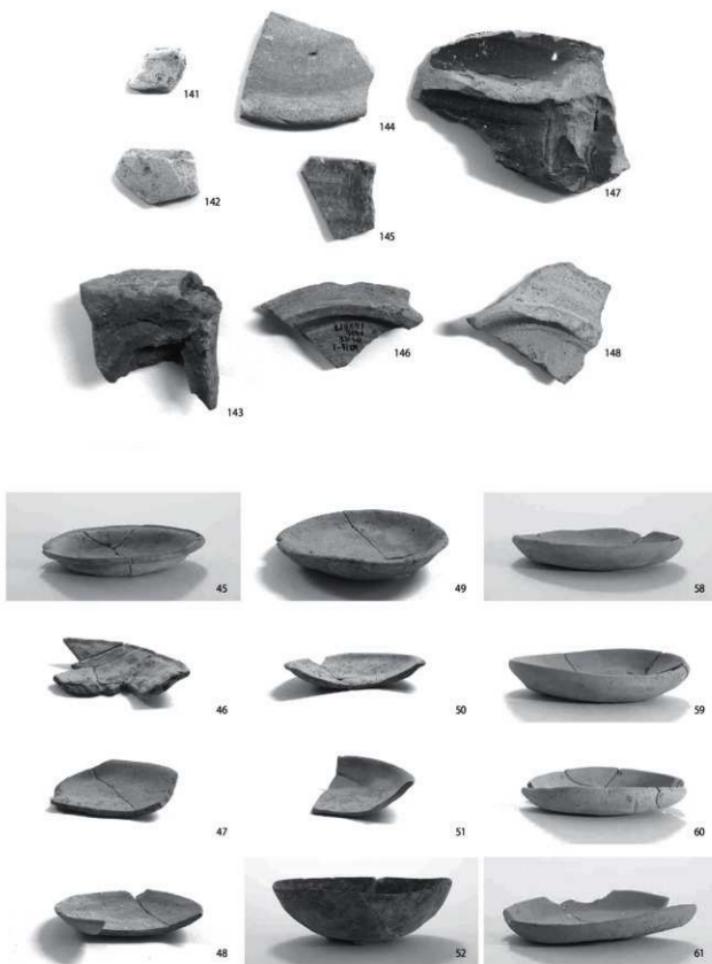
4 第2トレーニチ土坑SK 203（西から）



8 第3トレーニチピットP 305 土器出土状況（北から）

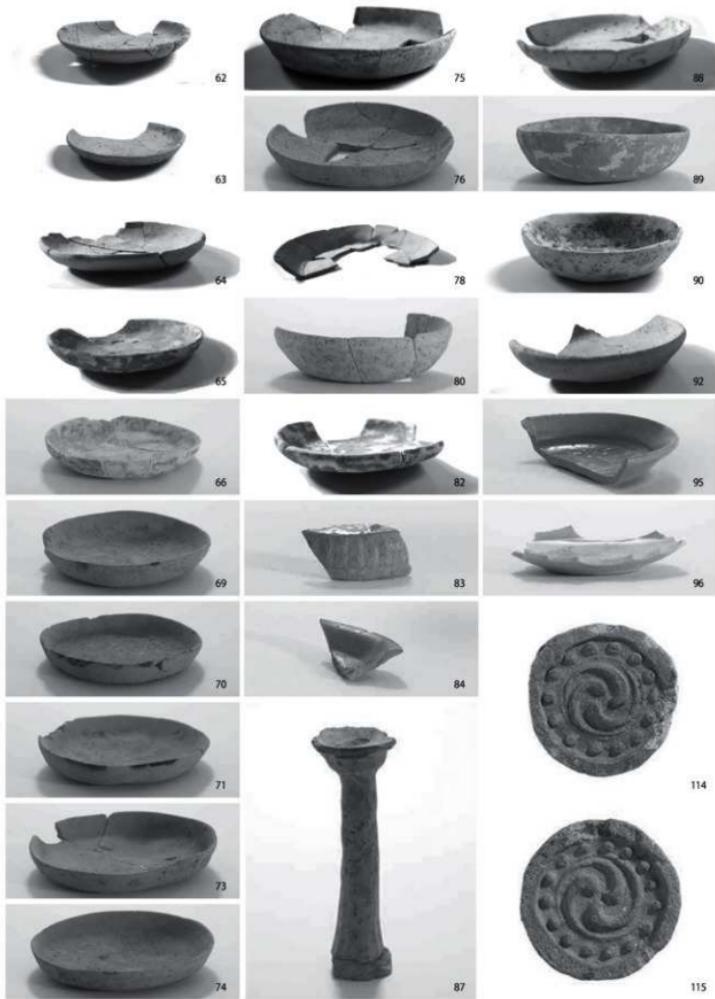


図版九 HS16—1 金井戸出土遺物（一）





図版一〇 HS 16-1 金井戸出土遺物 (II)





図版一
HS16-1
金井戸出土遺物
(III)



116



121



127



117



122



128



118



123



129



119



124



130



120



125



126



131



132



133



134



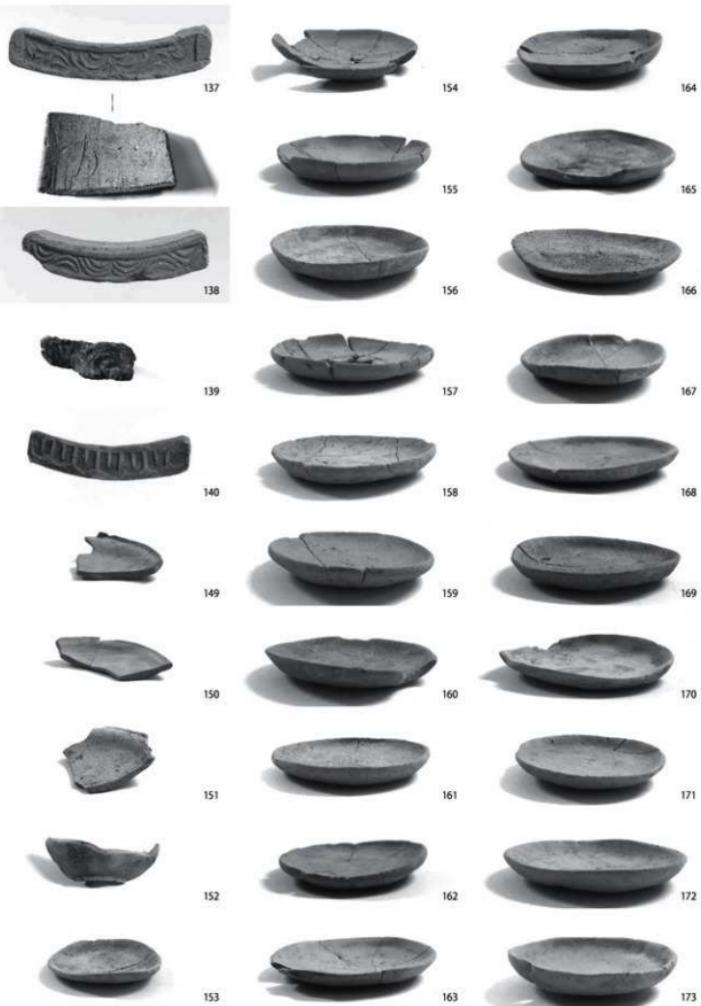
135



136

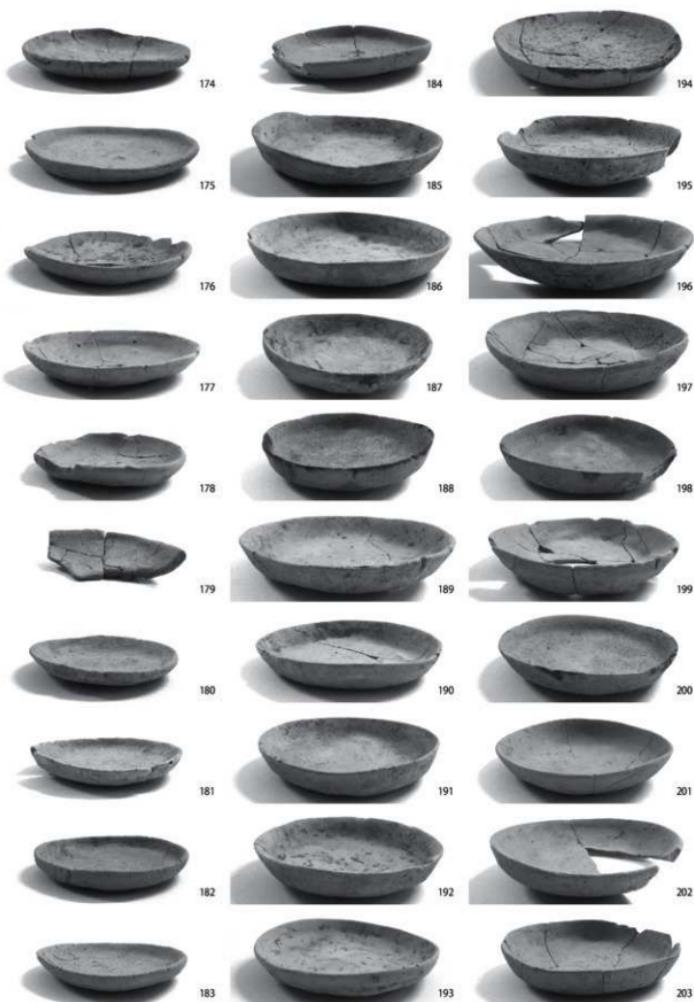


図版一二
HS 16-1 金井戸出土遺物 (四)



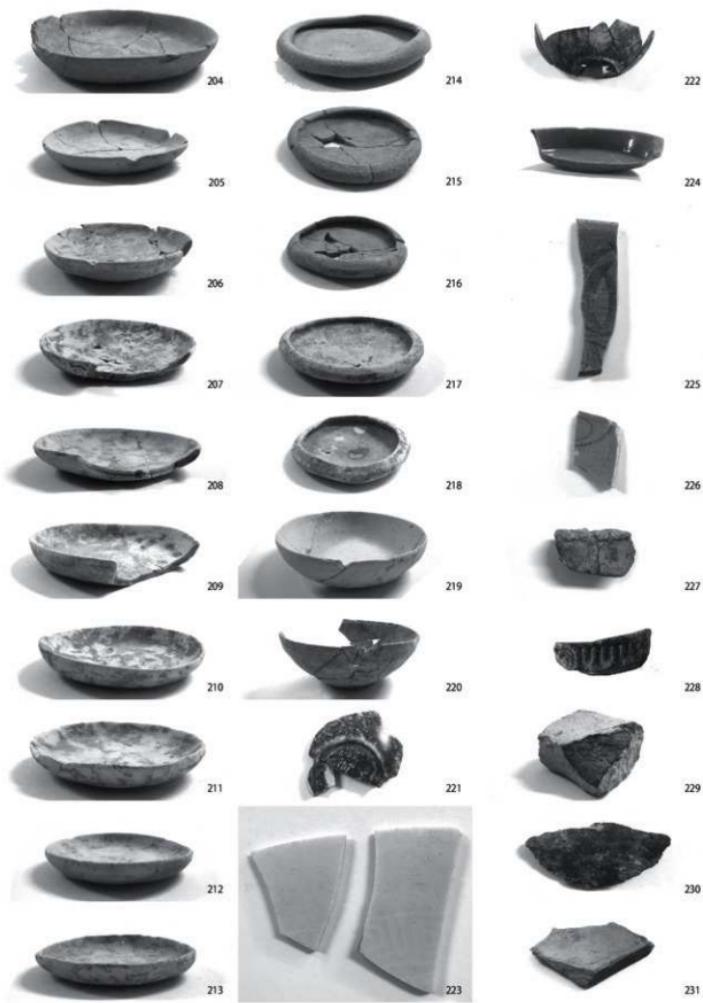


図版二三 H.S.16-1 金井戸出土遺物(五)





図版一四
HS 16-1 金井戸出土遺物（六）





島本町文化財調査報告書 第45集

発行 島本町教育委員会
〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号
TEL 075-961-5151

発行日 令和5年3月31日

印 刷 三星商事印刷株式会社
〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下ル三番町273番
TEL 075-467-5151

